

成人

第七〇号

巻頭言

成人会とは、成人に達した人の会ではなく、
成人をねがう人の会であり、かつそれが、
そのスローガンとするところであってほしい
と思うのであります。

目次

【研究室より】

贈る言葉	島田勝巳	一頁
わが研究人生	荒川善廣	二頁

【二〇二二年度 卒業論文 優秀作】

『スター・ウォーズ』の描く「家族の神話」の物語と学び		
—「現代の神話」の役割と現代人の課題—	水谷竜也	四頁
フエティツシユ神から見る宗教起源	政田龍太郎	二八頁

【二〇二二年度 宗教学科 卒業論文一覽】

【成人会より】

今年度の活動をふり返って	七〇代委員長	田垣広太郎	四四頁
二〇二二年度 成人会役員名簿・成人会活動報告			四四頁

【会員の声】

・	四五頁
・	
・	

【研究室より】

贈る言葉

宗教学科主任 島田勝巳

私が宗教学科主任に着任してから五年目が終わろうとしています。その間、三年あまりはコロナ禍により、大学のさまざまな活動の中止や変更を余儀なくされました。今日卒業する皆さんも、学生生活の半分以上をこの異常な状況のなかで過ごしたことになります。

でも同時に、この一年で、次第にコロナ以前の日常が戻りつつあることも感じます。特に今年度は、授業やクラブ活動をはじめ、大学祭もほぼ完全な形で復活しました。大学にかつての活気が戻ってきたようで、キャンパスを歩いていても、嬉しい気分を味わえるようになってきました。

しかし、世界に目を転じれば、この五年間でさまざまな問題が出来し、事態はますます良くない方向に向かっていきます。ほぼ一年前に始まったウクライナでの戦争は未だ終結を見ず、また、世界各地で大地震や異常気象による大きな災害が生じています。戦場では国家間の、あるいは人間同士の対立を目の当たりにする一方で、被災地では、悲惨な現実を前に、人と人とが手を携えて助け合う姿も報じられています。

こうした姿は、何も外の世界で起こっていることに限りません。これから社会に出て行く皆さんも、それぞれの持ち場立場で、お互いが助け合う姿を目にすることもあれば、人と人とのいがみ合いや揉め事を経験することもあるでしょう。そんな時に、皆さんにぜひ思い出してほしい言葉として、私自身の言葉に代え、教祖のひながたから次の逸話を贈ります。

「世界は、この葡萄のようになあ、皆、丸い心で、つながり合うて行くのやで。この道は、先永う楽しんで通る道や程に。」

（『稿本天理教教祖伝逸話篇』、「二三五 皆丸い心で」）

私たちが、いつも丸い心でいることは、決して容易なことではないでしょう。でも、私たちが、いつもつながり合っていくという気持ち大切に続けることは、もしかすると可能かも知れません。そうした思いを大切にしていくことで、これからの皆さんの道が、真に「楽しんで通る道」になることを、心から願っています。

卒業、おめでとう。

わが研究人生

荒川 善廣

令和五年三月をもって天理大学を退職するにあたり、これまでの研究生活を振り返ってみたい。

そもそも回り道をして大学で哲学を専攻するに至ったのは、天理教のすばらしい教えを学問的に整理し、神学の体系にもたらそうという目論見があったからである。神学とは、神の啓示を信じた上で、それを理性の下に一般の理解にもたらそうとする営みである。天理教も啓示宗教であるから、キリスト教と同様に、その教義学は神学と呼ばれるべきである。そして神学を営むにあたってその手段として用いるのは哲学の論理である。たとえば、キリスト教の教父神学者であるアウグスティヌスは新プラトン主義の哲学を用いて神学を営んだし、トマス・アキナスがアリストテレスの哲学を用いて壮大な神学の体系を打ち立てたのは周知の事実である。もちろん、哲学なら何でもよいというわけではなく、それぞれの神学との相性がある。

天理教の教義の体系化を目指すさい、その最もふさわしい手段はホワイトヘッドの哲学である。それは彼の存在のとりえ方や神についての見解などを瞥見しただけで察しがつく。一つ例を挙げると、ホワイトヘッドは、「世界は神の身体で

ある」ということを、特定の宗教の教義を前提にせず、純粹な哲学の論理として述べた最初の哲学者である。伝統的な有神論では、神は純粹な精神であつて、人間のような身体性(物本性)をいっさい持っていないと考えるが、この点で、「この世は神のからだ」と説く天理教の神観とは決定的に異なる。この「世界は神の身体」を単なる比喩的表現としてではなく、厳密な哲学の論理によつて概念的に述べたのがホワイトヘッドである。

私が最初に書いた天理教の論文(昭和六十三年に天理大学に着任する以前に書いたもの)は、「現代思想と「元の理」」であるが、いま見返してみると、その後教員として天理大学在任期間中に書くことになる数多の論文のテーマが少なくとも萌芽のかたちでほとんどすべて含まれていることが分かる。その中でもとりわけ重視した論題は、魂のとりえ方についてである。従来は、魂を心と同じひとつのものと考え、思维的実体としてとらえる傾向が強かったが、このとりえ方では教理解に支障をきたすと言わざるをえない。むしろ、心と身体が現象としては同類で、魂とは身心現象がそこにおいて生起し、統一される「場所」としてとらえるべきである。この「場所」は本来、プラトンが自然哲学において提示したもののだが、ホワイトヘッドがそれを人間経験の基底に見据え、人格的同一性を保証する「場所」としてとらえ直したものである。

このように魂を「場所」としてとらえることにより、「こふき」話に登場する水棲動物が魂であることや、「月日のやしろ」の「やしろ」が教祖の身体ではなく、魂であること、さらに、その魂が存命であることから今も教祖は「月日のやしろ」として親神と一体になって救済の業を働かれているといった教えが整合性をもつのである。

もう一つ重要な概念として、事物の「客体的不滅性」がある。ホワイトヘッド自身は気づいていないが、「客体的不滅性」は、日本の宗教思想の文脈では、「みたま」（霊）に相当する。天理教教典は「みたま」や祖霊殿についていっさい言及していないが、天理教には祖霊殿もあるし、御霊祭もおこなっている。天理教には「出直し」「生まれかわり」といった教えがあるが、もしも「たましい」と「みたま」が霊魂という同じ一つのものであるなら、出直した人間の霊魂が別の人間として生まれかわり新しい人生を送ることと、亡くなった人間の霊魂を「みたま」様として祀ることは矛盾することになる。しかし、魂と霊は密接な関係にあるが、別物であるとすることによって、矛盾は解消する。

このような研究によって得られた知見を、折に触れて、授業や講義を通して学生に伝えてきたところである。卒業生が将来、高山布教を目指す際に、参考にさせていただければ幸いである。

『スター・ウォーズ』の描く「家族の神話」の物語と学び
―「現代の神話」の役割と現代人の課題―

水谷 竜也

コメント

島田 勝巳

本稿は、現代を代表する米国の映画監督・ジョージ・ルーカスによる人気映画・『スター・ウォーズ』シリーズに見られる「神話」的な性格とその現代的な意義について論じた力作である。

全体は三章構成で、第一章ではルーカスが影響を受けたとされる神話学者ジョセフ・キャンベルの『千の顔をもつ英雄』を中心とした神話学的な議論が展開され、本論文の理論的な枠組みを提供している。第二章では、筆者自身が長らく関心を持ち続けてきたこの壮大な物語が、いかに神話論的な観点から読み解けるかを、特に父子関係と母子関係を軸として考察される。筆者はこれを、勸善懲惡を説く英雄物語と悪に転落する悲劇とを対比させながら、立体的に描き出そうとし

ている。そして第三章で筆者は、「スター・ウォーズ」シリーズ全体のいわば通奏低音として「象徴的親殺し」があることを指摘したうえで、それが今を生きるわれわれにいかなるメッセージを投げかけてくるのかを、大胆かつ想像力溢れる筆致で論究している。

第一章における「神話の知」の現代的意義をめぐる議論にはやや粗い部分が散見され、特に筆者が河合隼雄の議論に引きずられて規範的な発言を繰り返している点は若干安易に映る。また、全体を通して、二次文献の参照及び引用の仕方に不明瞭なところが見られた。それがどのような主旨のもので、なぜその引用が必要なのかについて、各所でもう少し詳しい説明があれば、筆者の議論もより説得力のあるものになっていただろう。

とはいえ、もとより「スター・ウォーズ」に対する筆者の知識が非常に豊富なこともあり、「象徴的親殺し」をめぐる分析において、少々荒削りな理論的枠組みも物ともしないような、力強くかつ独創的な議論が展開されていた点は特に高く評価したい。まさに、「好きこそ物の上手なれ」という言葉を体現したような秀作であった。

序

本論文は、一九七七年に制作された映画『スター・ウォーズ』とその一連のシリーズについて神話学的解釈をもとに紐解き、作中での「家族」の描かれ方について検討するものである。

映画『スター・ウォーズ』シリーズはジョージ・ルーカスの著作『千の顔をもつ英雄』の影響を受けていることで知られる。同書は、古今東西の神話には共通したパターンがあること、それが世界中の人々の心をとらえているということとを明らかにしている。したがって、この点から考えれば、『スター・ウォーズ』は、神話の構造を何らかの形で用いつつ描かれていることとなる。

『スター・ウォーズ』の原作者であるジョージ・ルーカスは、およそ三〇年の時間をかけて物語を紡ぎ、紆余曲折ありながらも、シリーズは最終的に一族の「愛と喪失の物語」として落ち着くこととなった。六作に渡り、一人の人物の墮落と救済が描かれ、母親の喪失や父と子の対立を経て愛が、憎しみを超える感情的な瞬間をもって結末を迎える。この「父と子の対立」というキーワードは、神話の中にも頻繁に現れるモチーフである。ゼウスが父クロノスを倒し最高神の座を奪ったように、父は強大かつ乗り越えるべき相手として描写され、英雄となった子に倒されるというプロットは、神話をはじめ、今では数多の創作物にみられるものである。そし

てそれらが伝えようとしていることを、『スター・ウォーズ』は映画という媒体を通じて観客に訴えたのである。野心に燃える映画作家によって現代に甦らされたこの一大神話は、我々に何を語りかけているのだろうか。

以上のような基本的な問題関心から、本論文の第一章では、『千の顔をもつ英雄』にて示された「モノミス」について考察し、英雄の冒険における父親の役割について検討する。第二章では第一章で考察したモノミスを踏まえた上で、家族の物語を中心に『スター・ウォーズ』のシナリオを振り返る。最後に、第三章では、『スター・ウォーズ』が描いた結論を、神話の展開を交えて紐解いていきたい。この点を検討することで、神話の教えが今もなお決して色あせることのないものであることが浮き彫りになると思われる。そのうえで、「家族」というものの在り方について、改めて深く考える際の端緒としてみたい。

なお、『スター・ウォーズ』シリーズは第一作の公開から四五年が経過した現在もなお様々な製作者によって新作が作られているが、本論文ではルーカス自身が中心となって制作された映画作品のみを対象とする。

第一章 『千の顔をもつ英雄』をめぐる一考察

第一節 神話を学ぶ意義

「現代人のわれわれにとっても神話は多くの示唆を与えてくれるものである。」とは、『神話の心理学 現代人の生き方のヒント』における河合隼雄の言である。神話は人類の長い歴史のなかで紡がれてきたものであり、その中には何らかの「教訓」が含まれている場合が少なくない。故に神話は人々に愛されてきたのであるが、その「教訓」は残念ながら現代ではあまり影響力を持ち得ているとは言い難い。科学の進歩によつて客観的・科学的知識が信憑性を増していくにつれ、多くの人々がもはや「太陽がアマテラスという女神である」といった話を信じなくなつてしまつたように、ものごとを神話にたとえることは真剣には受け止められなくなつてしまつたためであろう。しかし、「科学の知」と「神話の知」の役割は異なり、決して神話のみが忘れ去られても良いということはないのではないだろうか。河合隼雄によれば、神話の知は「自分が自分の道を歩んでいくのを支える」ために必要なものであり、神話の知がなくなることは「聖域」がなくなることだ、という。赤ちゃんや無垢な子供は聖域として守られていたものの、今は暴徒が平気で侵入してくる。科学の進歩によつて人がいろいろなものを手に入れることと同時に、それに見合う代償を払っているということを認識しておく必要がある。

心の奥底に神話の人物が住んでいる、と河合隼雄は言う。この考えの発端と言えるのが、心理学者のカール・グスタフ・ユングの理論である。彼はたたくさんの患者の想像や姿に

耳を傾けるうちに、それらの内容が世界の神話にそっくりであると気づいた。しかも世界中にある神話は、文化的交流がないはずの遠く離れた地域の神話と共通するものがあることに注目し、人類の心の深いところでこうした共通の物語を生み出す層が存在するという考えを示した。それを「集合的無意識」と呼び、神話の物語の型を「アーキタイプ」と呼んだ。そんなユングの結論は「人間というものは生きてゆくために、神話を必要とする」だった。人が無意識のうちに心の拠り所とする神話をもつて、ユングは精神病の患者たちと接することとなる。しかしユングはある問いに躓く。

神話の知はかつて共同体によつて共有されていたのだが、現代では自分一人の努力によつて「自分に必要な神話」を見つけないならなくなつていく。これに耐えられなくなつた場合起こる事例として、河合隼雄はオウム真理教を例に出す。人々は強力な神話を提供してくれる者の元につどい安心を得ようとするというのだ。しかしそれは時に危険極まりないものとなつてしまい、とてつもない事件へと発展してしまふ。自分を支える「自分の神話」を求めるがゆえにこうしたことが起こつてしまふのである。

ユングを苦しめた問いとは、自分が何の宗教の神話によつて生きていくのか、ということだった。既存の宗教を信仰していないにも関わらず、ユング自身もまた神話に類似した夢を見ていた。自分の中に住まう神話は一体どこから来たものなのか。河合はこの問題について、アンリ・エレンベルガ

一の言葉を引用する。

曰く、人間の無意識下には「神話産生機能」があるという。

それは自己の「中心領域」であり、内面のロマンスにまつわる不思議な創作が常に行われている。無意識は物語や神話の創造に恒常的に関与しており、その創作は夢や妄想などの形で表現化される、という。無意識から生み出される神話と言っても、無意識の持つ普遍的な性質のため、それは個別のものでありながら普遍的なものにつながっていく。たとえば現代の日本人の夢が古代ケルトの神話と類似するということも不思議ではない。そのため、河合は心理療法家として患者と向き合うとき、その無意識内に神話産生機能があるというところが患者に寄り添うことへの希望になると述べている。その人の無意識が生む神話を垣間見ることによって、「自分に必要な神話」が見えてくるのである。

以上のことから、神話を学ぶことは生き方について再考するきっかけになると言えるのではないだろうか。「神々の物語」を知る事は、単に古い知恵を知るだけでなく、現代に生きる知恵を引き出すことが可能なのである。

おそらく、人間がこの世に存在するかぎり神話は読みつがれ、語りつがれてゆくことと思う。そして、それらを研究する学問としての神話学に取り組み人も、絶えることとはないと信じている。

第二節 『千の顔を持つ英雄』の「モノミス」

ジョーゼフ・キャンベルもまた人の心の奥底に神話が潜んでいることについて言及している。キャンベルは『千の顔をもつ英雄』にて、想像力の源である人間の精神の中には共通の人間性が組み込まれていて、人類が普遍的に持つ無意識の欲求や恐れなどが象徴的に表現されているのが神話であるとのユングと同じ理論を示した。そして各人の精神によって生み出された数多の神話にはある一つの共通したパターンが存在している。それが英雄の冒険で、キャンベルはこれを「モノミス」と呼んだ。日常生活から旅立った英雄は助力者とともに試練に挑み、これに打ち勝つことで見返りを得て最後は元の世界に戻り、手に入れた恩恵で世界を復活させる、というのが大雑把な筋書きである。さらに簡略化するならば、英雄の旅は「旅立ち―試練(イニシエーション)―帰還」の三段階にまとめられる。

『スター・ウォーズ』をはじめとした後年のいくつかの作品は、この流れに従って創作された。「長い目で見てみれば、二十世紀で最も影響力のあった書物は、ジョーゼフ・キャンベルの『千の顔をもつ英雄』になるのかもしれない。」と言われるように「モノミス」は普遍的でありつつ、どこまでも人の心を魅了するものだったのである。共通したパターンが存在するということは、人間の深層心理に訴える何かがあるということなのだろう。

私たちの前にあるのは常に、形は変わっても驚くほど中身は変わらない同一のストーリーであり、これから知ったり聞いたりするというより、むしろまだ経験していないということ執拗に暗示している。

もちろん、必ずしもすべての神話がこの構造をなぞっているわけではないだろう。キャンベル自身「神話を解釈することにあたって決定的な体系は存在せず、今後も確立されることはないだろう」と書いている。そのうえで大事なことは、神話がどのように機能するか考えることである。神話の筋書きは時代の変化によって損なわれたり書き換えられたりする。すなわち、その伝承が伝えられた土地によって最適化された内容に差異がでるのは珍しくないことであるという。キャンベルはこれを「あらゆる姿をとることができる神」プロテウスに例え、その真の姿を引き出すには「その老人をしつかりと捕まえ、強く押さえつけ」なければならぬとしている。現在の我々は、神話のイメージをしつかり捕まえておくことが求められる。

神話についてはさまざまな判断が下される。というのも、神話とは何かという観点ではなく、どう機能するか、過去にどのような役立ってきたか、現在どのように役立つかという観点から考えた場合、神話は、生命そのものが

そうであるように、個人、集団、時代、精神、要求に合わせて、その姿を現すからである。

その上で、キャンベルはインドの聖典ヴェーダを引用してこう書いている。「真実はひとつ。賢人はそれにたくさんの名前をつけて語る」。神話の内容は多種多様だが、その源泉は共通しており、すべての宗教の本質は同じである。

神話で人々の目を引くのが、世界を救う英雄だろう。神話の英雄はすでに生まれたもののために戦うのではなく、これから生まれるもののために戦う戦士である。キャンベルは英雄の任務について「父親(龍、試練を課す者、人食い鬼の専制君主)の執着を葬り、宇宙を再生産する命のエネルギーを解放することにあるのである。」と述べている。ここでの父親の役割は、自身が奪った先代の皇位と自分にとつて代わるであろう息子の権威のように変化を促すものではなく、動かぬ専制君主として君臨することであり、息子たる英雄はこれを打破し新たな時代を築き、父親は敗北を認めなければ時代の流れは動かないのである。子は父を殺す結果となるが、父は残忍な人物となることでこの衝撃を和らげている。子は父の地位を引き継ぎ、それが世界の終末および再出発となる。

統治者は、「物事はこうあるべきだ」という考えはもちろん、「これが自分だ」という認識についても時代遅れ

の考えにしがみつくとがある。だが、英雄ヒーロー・ジャーニーの旅は直線ではなく螺旋を描く旅だ。私たちは旅をしながら、常に自分と王国を再生し続けなくてはならない。古びた真実やアイデンティティにしがみついている統治者は、邪悪な暴君に姿を変え、王国や個人フシケの活力を封じ込めてしまう。そうした事態を避けるには、もう一度、古い統治者を犠牲にして、新しい——旅から帰ったばかりの——英雄に王国の統治を託さなくてはならない。そうすれば、王国には豊かな実りと繁栄がもたらされるだろう。

第三節 エディプス・コンプレックス

神話における父の役割は先述したように殺されても仕方ない残忍な悪役であるとされる。子供が父親を敵視する感情を、フロイトは「エディプス・コンプレックス」と名付けた。

ギリシヤ神話におけるオイディプスの物語に由来するこの単語はまさしく先述の「各人の無意識下に神話の人物が潜んでいる」ことの代表例である。

テーバイの王ラーイオスは神託によって、生まれた男の子が父親殺しになるだろう、と知りつつ妻のイオカステと交わり、男の子が生まれた。ラーイオスはその子の踵をピンで貫

いて捨てた。しかしその子は羊飼いに拾われ、後に隣国のクリントス王の養子として育てられた。その子はオイディプスと名付けられた。オイディプスは成人したあと、アポロン神より、父を殺し母を妻とするだろうという神託を受け、クリントス王を自身の父だと信じていたためにその運命から逃れるべくテーバイに向かった。その途中老人と些細なことで喧嘩になり、老人を殺してしまう。その後オイディプスはテーバイを苦しめていた怪物スフィンクスを退治し、それによってテーバイの王となり妻を手に入れる。しかしのちにオイディプスは非常な現実を知ることとなる。それは自身が妻とした人物が自分の母であり、かつて殺した老人が自分の父だったことである。この事実によりイオカステは自害し、オイディプスは自らの目を突いて盲目となる。

この悲劇は、フロイト曰く「単に幼児期の望みを叶えたことを示すに過ぎない」という。母を至福とし、父はそれを奪おうとしてくる敵とみなす意識もまた人の中に存在するとキヤンベルは述べており、父殺しのありふれた物語の根底にあるものと見ていいだろう。

また河合隼雄は、この事象が家族間でなくとも姿を現すと言っている。例えば、平素はしっかりとした判断力のある人が、目上の人との関係になると、急に攻撃的になってきて、しなくてもいい反抗をして、結局は職を失うことにさえなる、という展開もエディプス・コンプレックスの影響で起こりうる。このように神話は今の時代を生きるわれわれにとつて

決して無関係とは言えず、その知識を蓄えることは人生の安定につながるのである。

神話はあなたに、自己の内面に向かうことができるのだ、と教えてくれます。そのおかげであなたは象徴のメッセージを受け始めるのです。自分の宗教の神話ではなく、よその神話を読んでください。というのも、自分の宗教はすべて真実を語っていると解釈する傾向がだれにもありませんからね。でも、他の神話を読むとき、神話のメッセージがはじめてわかってくるのです。神話のおかげでようやく、いま生きているという経験と関わることができ。それがどんな経験かを、神話は語ってくれます。

第二章 現代の神話としての『スター・ウォーズ』

第一節 神話を映画で描く意義

先述の河合隼雄もそうだが、キャンベルもまた現代において神話の役割が弱まっていることについて言及している。『神話の力』の中で、キャンベルは「これから長い長いあいだ、私たちは神話を持つことができませぬ」と言い切っており、その理由について「物事は神格化されるにはあまりにも早く変化しすぎているので」と答えている。

映画という媒体においてもこういった流れが見られた。

神話等をモチーフとした映像による物語・英雄譚の創造は、第二次大戦前・戦中にもあった。ドイツの『ジークフリード』(Siegfried、一九二四)があり、アラビアが舞台の千夜一夜物語の挿話『アリ・ババと四〇人の盗賊』(Ali Baba and the Forty Thieves、一九四四)がハリウッドで映画化されていた。しかし戦後、急速な科学技術の発展や実証主義の時代が到来し神話的な物語の力は衰えた。禁じられた場所を探検する英雄物語や、魔物のキャラクターが活躍する神話的・非科学的物語表現は映画界において下火となり、むしろ嘲笑されるようになった。時代性としてアジアやユーラシア大陸では共産主義台頭があり、巨大な政治権威に対抗する若者文化は世界的現象となり、映画界はヌーベルバーグ(ニューウェイブ)へ軸足が移動した。神話的英雄映画は意に介されるのが無くなった。しばらくは世界的に神話が忘れられ、その価値を引き合いに出すこと自体、古臭いと考が登場したのである。

ジョージ・ルーカスは『スター・ウォーズ』を通じて、観客に、それも特に若い者たちにメッセージを届けようとした。それには当然、彼がインスピレーションを受けたという『千

の顔をもつ英雄』及びキャンベルの言葉が関わってくる。

『スター・ウォーズ』を作る際、意識的に神話や古い神話からのモチーフを再現することから着手した。(中略)ほとんどの文化に共通すると思われるアイデアを盛り込もうとした。なぜなら私自身もそれらに魅せられており、ジョー・キャンベルからそのことを学んだからだ。私がやっているのは古い神話を新しい方法で伝えること。神話の核をローカライズしているんだ。どこか特定の場所というよりは、世紀末に向けたローカライズだ。

ルーカスは実際にキャンベルと親交を持ち、ルーカスの根城としていたスタジオ・スカイウォーカーランチにてキャンベルと一緒に『スター・ウォーズ』を見たという。ルーカスはキャンベルとの出会いについて、「彼の本に出会ってなければ私はいまだにスター・ウォーズ・シリーズの脚本執筆に追われていただろう」と語った。

「古い神話を新しい方法で伝える」ことで、どのような効果があるのか。ルーカスは『スター・ウォーズ』を創った動機として「おとぎ話を知らずに育った世代がいる」と語る。

ルーカスは、この根なし草的の社会にとくに必要な、伝統的価値観を取り戻したかった。善と悪、正と邪、責任と

無気力の違いを、説教するのではなく、提示することのできる、時を超えたおとぎ話を求めていた。

現代の神話を力づけ、基本的な道徳を教える、子供のための映画を創りたかったんだ。(中略)ほんとうに基本的なことを、誰も言っていない。抽象的なことはやりやってくるんだ。子供たちに、『いいかい。これは正しくて、これは間違いだよ』って言ってやるのを、みんな忘れていくんだ。

先ほどの「これから私たちは神話を持つことができない」という問題に、キャンベルは「各個人が自分の生活に関わりのある神話的な様相を見つけていく必要があります」という回答を示した。現代人は集団で共通の神話を持つことがない。そのため、神話から学ぶという行為は各個人にゆだねられる。これを怠れば悪事や犯罪につながるというのほすで述べた通りである。ルーカスはその思想を映像において打ち出した点で現代的であり、映像であったからこそその影響力は強力であった。

第二節 父の探求―旧三部作

ルーカスの構想では、『スター・ウォーズ』は一二本の映画から成る壮大なシリーズ(以下、公式にならない「サーガ」と

表記する)になる予定で、三年に一本のペースで進めていくはずだった。最終的にルーカスが手掛けた『スター・ウォーズ』は全六本となるのだが、そのうちの前半三本がこの節で扱う「旧三部作」と呼ばれるブロックである。

一九七七年に公開された第一作(後に『新たなる希望』というサブタイトルがついた)を皮切りに、一九八〇年の『帝国の逆襲』、一九八三年の『ジェダイの帰還』が続けて公開された。

この三部作ではルーク・スカイウォーカーを主人公に据えた英雄物語が描かれる。先述の通り本作はキャンベルの提示した「モノミス」に従ってストーリーが形成されており、主人公ルークの冒険は宇宙を舞台とした神話とも呼べる。善と悪、本作では光面と暗黒面とよばれる対立をもとに、圧政を強いる銀河帝国とそれに抵抗し帝国を倒そうとする反乱軍による戦争が繰り広げられる。

『新たなる希望』で主人公ルークはかつての戦争の英雄・オビ・ワン・ケノービから、自分の父親がジェダイと呼ばれる正義の戦士であったこと、戦争において父親がダース・ベイダーという敵に殺されたことを教えられ、ベイダーを親の仇として、父親の形見である青いライトセーバーを持ちベイダーを倒すために戦いに出ることになる。しかし続く『帝国の逆襲』の終盤では、仇だと思われていたベイダーこそがルークの父親・アナキン・スカイウォーカーであると明かされる。ここから、スター・ウォーズの「家族」をテーマに据え

た物語が幕を開けることとなる。

本稿第一章で父親は「殺されても仕方ない残忍な人物で、その息子である英雄がこれを倒さなければ新たな時代は訪れない」と述べたとおり、ベイダーはルークにとつて倒さねばならない相手になるはずである。実際、ルークが戦いに出るきっかけを作ったオビ・ワンも、ルークがベイダーを倒すことを望んでいた(なおこの点についてオビ・ワンはルークに嘘をついていたことになるが、かつて正義の戦士だったアナキンの心は、暗黒面に堕ちベイダーとなった自身にかき消されたために「殺された」、ようは「見方の問題」だと説明されている)。この物語の背景にある銀河帝国との戦争も、ベイダーが倒されることによつて決着がつくだろうということは観客も理解しているし、それは前述のように新たな時代を築くために必要な過程である。おまけに『帝国の逆襲』の終盤でベイダーはルークの右手を切り落とし、ルークに「私たちが皇帝を倒し、父と子で銀河を支配しよう」と誘惑する。悪役としての立場は決定的なものであった。しかし、ルークは『ジェダイの帰還』において、ベイダーと戦うことを拒絶し、和解を試みる。

彼を説得し銀河皇帝と対決するためにわざと投降したルークは、ベイダーとなった父親にも良心が残っている」として、いっしょに逃げようと誘う。これは『帝国の逆襲』の最後で「父と子で銀河を支配しよう」と言ったべ

イダーによる誘惑の裏返しとなる。ルークの申し出を拒絶したベイダーは、皇帝の指示によって、ルークの暗黒面を引き出そうとする。ルークは『帝国の逆襲』で右手とともに失った父親譲りの青いライトセーバーの代わりに、自作の緑のライトセーバーでベイダーと剣戟をおこなう。この自作という点が重要であり、父親から自立したことが視覚的に表現されている。

ルークは暗黒面を断ち切り、ベイダーに打ち勝つ。前回右腕を切られた仕返しに、ベイダーの腕を切り落としたのである。父親に勝利することで、ルークは暗黒面との境から抜け出すことができた。しかしベイダーにとどめを刺すことはしなかった。皇帝はルークを暗黒面へ誘うが、ルークは「僕はジェダイだ。かつて父がそうであったように」とこれを断る。怒った皇帝はルークを殺そうとし、ルークは父に助けを求め、「父さん！」と叫ぶ声を聞き、ベイダーは息子を助けるために皇帝をシャフトの底へと投げ込むのだった。ベイダーにとどめを刺さなかったこと、父親に良心が残っていると信じ助けを求めたことが、ベイダーを呪縛から救済し改心へと導いたのである。こうして、父と子の物語は、父親への救済という形で幕を下ろした。

第三節 母の喪失―新三部作

『帝国の逆襲』は、公開時から「エピソードV」の副題がついていた。観客の目から見れば『帝国の逆襲』は二作目であるはずなのだが、ここに来て前作『新たなる希望』より前に三作の構想がある事が知らされたのである。しかしシリウスはルーカスの事情により『エピソードVI ジェダイの帰還』をもっていったん終了し、語られなかった前日譚が観客たちの前に現れるのに実に一六年もの時がかかった。

一九九九年に『エピソードI フォントム・メナス』が公開され、二〇〇二年『エピソードII クローンの攻撃』、二〇〇三年『エピソードIII シスの復讐』をもって、ルーカスの手掛けるサーガは完結を迎えた。この後半三部作は「新三部作」と呼ばれることとなる。

新三部作では、アナキン・スカイウォーカーが悪の権化であるダース・ベイダーへと変貌していく様が描かれる。それは旧三部作が下敷きとした「モノミス」とは異なる道を行くものであった。アナキンは主人公の役割を演じるのだが、その結末は観客の知つての通り悪に落ちることであり、善が悪を倒す旧三部作とは真逆といえる。しかし最後に皇帝を倒し善を成すのがアナキンであるとするなら、六作まとめてアナキンを中心とした英雄物語にも見えてくるという側面がある。『フォントム・メナス』では、アナキンは幼少期の姿で登場する。彼は母親とともに奴隷として砂漠の惑星で働いていた。アナキンの母親・シミは、男性と結ばれることなくアナキンを産んだという。アナキンは物事が起こる前に予測でき

るといふ「特別な力」を持っており、シミは彼を奴隷から解放しよりよい将来を与えたいと思っていた。

共和国の使者であるジェダイたちは砂漠の惑星に偶然降り立ち、アナキンと出会う。ジェダイは特殊な出自と能力をもつアナキンを育てることにし、アナキンは幼いにも関わらず母親と別れることとなる。必ず戻ってきて母を自由にすると約束をして。

続く『クローンの攻撃』では、アナキンは青年となつていく。のちの因縁の相手であるオビワンを師として、ジェダイとして成長を重ねていた。それと同時に、彼はパドメという女性と恋に落ちる。しかしジェダイの掟は「執着心を生む」として婚姻を禁じており、アナキンは自身の気持ちと掟で板挟みとなる。

ある時アナキンは「母が苦しんでいる」悪夢にうなされるようになり、シミを助けるためパドメとともに故郷の惑星へ行くこととなる。しかしアナキンが到着していたときにはシミは何者かに連れ去られており、アナキンはシミを探す。彼はひどく傷ついた母親を見つけ、介抱するものの、シミは息を引き取ってしまう。シミを傷つけた者たちにアナキンは激高し、彼らを虐殺するのだった。この一件が原因で、アナキンは「愛するものを死から助ける力が欲しい」と思うようになり、パドメにより執着するようになる。結果的に、アナキンとパドメは秘密裏に結婚する。

『クローンの攻撃』の終盤で、ジェダイ率いる共和国と分

離主義勢力による戦争が勃発し、アナキンとオビワンは英雄として名声をあげることとなる。戦争の終盤が描かれた『シスの復讐』で、この戦争の黒幕がダース・シディアスという人物であることが明かされる。彼は共和国を率いながら同時に分離主義勢力である自身の弟子に指示を出しており、戦争を一人で操っていたのである。のちに銀河皇帝となるシディアスはアナキンに自身の弟子を殺させ、彼を新たな弟子につけようと企む。この間パドメは妊娠しており、アナキンは母の時のようにパドメが苦しむ悪夢にうなされていた。彼女を助けたいと思っていたアナキンは、シディアスの「暗黒面の力があれば愛するものを救うことができる」という言葉に惑わされる。同時に、戦争を通じてアナキンの中でジェダイに対する不信感が募っていた。それらが原因で、アナキンはシディアスに屈し、ジェダイを裏切ることとなる。

シディアスからダース・ベイダーの名を授かったアナキンはジェダイたちを殺戮し、シディアスは銀河帝国の樹立を宣言する。殺戮を免れたオビワンはパドメを連れアナキンの説得にかかると失敗し、かつて師弟であった二人は戦うこととなる。

ここには、人間の最も恐ろしい側面が描かれている。本来の仲間や信頼すべき人物への、疑いの気持ちと、自分が全てを支配したいという、身の程知らずな独占欲である。アナキン・スカイウォーカーは、こうした心の地獄

にはまってしまうのである。アナキンを常に良い方向に導こうとしてきた師であるオビワンは、このときのアナキンには、もはや自分の支配欲を阻もうとする敵としか見えない。また、最愛の妻であるパドメさえ、ここにいたっては、オビワんとつるんでアナキンの作ろうとする理想社会(それは単なる独裁社会なのだ)建設の夢を壊そうとしているように見えてしまっている恐ろしいまでのアナキンの独善性の救いようのなさ、反省のなさは、地獄絵図そのものである。

最終的にオビワンはアナキンを下すも愛情からとどめを刺すことができず、アナキンは重傷を負いながらも生きながらえる。しかしパドメはアナキンを説得する際激昂した彼に首を絞められたことで倒れてしまい、双子を産み落として死亡する。アナキンはシディアスの延命措置によって機械の体になってしまい、そこでパドメの死を聞かされたことで深く絶望する。またしても愛する者の死を止められなかったアナキンは、皇帝の手下として生きていくことを受け入れさせられる。

パドメの残した双子のうち、一人はルークと名付けられた。ルークはオビワンのよって砂漠の惑星に住む夫婦に預けられ、オビワンはルークの成長を待つこととなる。

このように、「ダース・ベイダー」アナキン・スカイウォーカーの過去が明らかとなり、観客は旧三部作でのベイダ

ーの行動の背景が理解できるようになったのである。四五

第四節 息子との対話と贖罪

こうして約三十年にわたり、ルーカスは壮大なおとぎ話を描き切った。完結を迎えたことで、シリーズそのものに「作中の時系列順に見直す」という楽しみが追加されたのである。当時の人々は劇場公開順、すなわちこの論文で取り上げた不規則な順番で追うしかなかったのが、現在はルーカスの想定通りの順番で視聴が可能となっている。改めて六本をエピソード順で見直したとき、英雄の冒険と父との対決を描いていた旧三部作に新しい発見があることに気づくだろう。アナキンベイダーの視点からルークの冒険を見ることで、この悲劇の人物が救済されるまでの物語として再構築されるのである。

自分の息子が生きており、それが帝国と敵対する組織にしていることを知ったベイダーは、彼を敵として殺そうとするのではなく、彼を味方につけようとした。悪に堕ちたとはいえ、ベイダーはまだ家族愛を求めているのである。そのうえ自身を陥れた皇帝への叛逆まで企てており、最終的な目標は親子で銀河を支配するとのたまひ、未だ強大な力を手に入れることに固執しているあたり、彼がもう正義の戦士に戻れない場所にいることは明らかだった。そんなベイダーを救ったのは、息子が父の善の心を信じた必死の呼びかけだった。

ルークの救いを求める声にベイダーは、ついに自分、すなわちアナキン・スカイウォーカーを悪の道に落とす最初の決断をやり直すチャンスに恵まれる。かつての自分勝手な決断でパドメは死ぬことになったが、彼が最後に払った犠牲は息子と娘を救った。アナキンは皇帝を裏切り、死を与えた。彼の内には善が残っているというパドメの信念が正しかったことが証明された。

アナキンは、息子を守り皇帝を倒した英雄として帰還したのである。しかしその代償は重く、アナキンを生かしていた生命維持装置が壊れてしまい、彼の死が確定してしまう。アナキンは最期に「自分の目でお前を見たい」と言い、ルークが機械の仮面を外すことで、ひどく衰えたアナキンの素顔が現れる。アナキンはルークに感謝を伝えると、息子の腕の中で静かに息を引き取ったのだった。

第三章 『スター・ウォーズ』の描く家族像

第一節 象徴的親殺しの失敗

ヒーロー・ジャーニー
英雄の旅とは、魂の旅の現実を知るための通過儀礼だ。旅を続けるためには、自分の人生を確立し、その後

にその支配を手放すことが求められる。これは、死や痛みや喪失と向き合う時の恐怖心から解放されて、人生の全体性を体験するためだ。そのためには、自我特有の狭い視野を拡大しなくてはならない。感情や、安全や、予測可能性を忘れ、肉体の安全や有効性、道徳を意識することさえやめなくてはならない。そうするうちに、「良いと悪い」「私とあなた」「私たちと彼ら」「光と闇」「正と誤」の二元的世界から抜け出して、パラドクスの世界へ導かれていく。

『スター・ウォーズ』は二人の主人公の冒険を通じて、「なにが正しくてなにが悪なのか」を浮き彫りにする。英雄の旅の成功と失敗をそれぞれ描くことで、その違いを明確なものにした。成否を分けた原因を考察する前に、英雄の旅が本来どうあるべきかについて論じるため、もう一度神話について考えなければならない。

ユング派の分析家、エーリッヒ・ノイマンは、英雄神話の物語を西洋における「自我意識の確立」の過程を示すものとして解釈した。曰く、神話に語られる英雄の誕生は、自我の芽生えを意味するという。自我が自立するには、無意識から独立した存在にならねばならず、外界においては「母なるもの」から自立しなければならぬ。この「母なるもの」を殺し一度は切り離すことでようやく自立できる。この「母

なるもの」を殺す過程が、英雄神話では怪物退治として描かれる。一方、「父なるもの」は社会の体現者であり、自我はそれに従うか乗り越えるかを迫られる。ただし、第一章で述べた通り、英雄はこの父親を倒す義務がある。

以上のことを踏まえて振り返ってみると、アナキンが「母なるもの」から離れようとしなかったことが彼の墮落した原因のもっともな理由であるとわかる。アナキンが母親と別れた行為は不完全で、いずれまた戻ってくるということを約束するあたり、母親からの愛を切り離すことができていなかったのである。その結果母を失ったときに傷ついてしまい、パドメに母性を求めることとなった。「母なるもの」を切り離せなかったことで、アナキンは「失うこと」を恐れるようになってしまう。もう二度と愛するものを失わないよう、アナキンはより強い力を求めたのである。その結果、彼の人生はエディプス・コンプレックスをなぞることとなる。

「神々の物語」はなかなか恐ろしい。親殺しを必要と語っているようなところがある。誤解のないようにぜひつけ加えておかねばならないが、これは神々の世界のこと、つまり象徴的な表現なのである。むしろ、このことの意味を明確に知らない者が、現実的に「親殺し」の罪を犯してしまうのではなからうか。内面的に行うべきことを、誤って外界においてやってしまうのだ。

「実際に殺す」ということの例が、まさしくエディプス・コンプレックスであるといえる。オイディプスが実の母と結ばれたのなら、アナキンは母の代わりになってくれるものと結ばれた。そのためジェダイの掟に背いたのである。それは彼の師であり、父のいないアナキンにとっては養父としての役割を持っていたオビワンの反抗でもある。エディプス・コンプレックスの患者が母親への愛ゆえに父親を憎むように、アナキンの憎しみはオビワンの向けられた。しかしアナキンはオビワンを倒すことができず、「父なるもの」を乗り越える試練に失敗する。それはエディプス・コンプレックスが良い結果をもたらさないことを示していると言える。なにもかも失ったアナキンは黒い仮面に閉ざされ、長きにわたり人間性を失うこととなる。皇帝への機械的な服従しか生きる方法がなくなつたからである。

ダース・ベーダーの仮面がはがされたとき、現れたのは未発達な人間、まだ一個の人格となるに至っていない人間でした。特徴などまるでない、奇妙であわれな顔。(中略)ダース・ベーダーは自分の人間性を発達させてなかった。彼はロボットだった。自分自身の意思ではなく、押しつけられたシステムに従って生きる官僚だった。これは今日私たちみんなが直面している脅威です。

キャンベルは旧三部作でのベイダーの姿をみてこう語った。

ベイダーは自立のできていない、命令でしか動けない未熟な子供だったのである。それは同時に、彼が自我を確立させることができなかったことを指す。

象徴的な言い方をすれば、自我の段階にとどまっている人生は、ロボットやおもちゃのような無生物として生きるのと変わらないことになる。

自我を確立させることができなかったために、アナキンはベイダーという「ロボット」に変えられた。アナキンがイニシエーションに身を投じるには必要な段階が一つ抜けていた。「母なるもの」との分離より先に、強大な力を手に入れようとしてしまったことだ。英雄はこの逆の順序を行かねばならなかったのである。

キャンベルのモノミスのなかに「父親との一体化」という項がある。ここでキャンベルは「きちんとイニシエーションを受けずに人生の役割を与えられると、思いがけず混沌を引き起こす」と述べた。父親はイニシエーションを与える存在だが、その実行を怠るといかな英雄と言えども破壊に至る。イニシエーションは英雄が「父なるもの」にとつて代わるために必要なものであるからだ。この国が未成年の飲酒・喫煙を禁じているのと同じである。英雄はイニシエーションを経てようやく「父なるもの」のいた地点に立ち、初めて「父なるもの」の意義を知る。「父親との一体化」とは、「父な

るもの」の視点を知ることである。

イニシエーションは生まれ変わりを求める。幼児期から抜け出し大人の世界へ移行するには、それまでの自分と分離しなければならぬ。それが自我の確立である。それができていなかったためにアナキンは「父なるもの」オビワンとの戦いに敗れたのである。

ルーカスは新三部作を「家族の大切さ」がテーマで「子供たちに対するメッセージである」と述べた。家族を大切にすることにあたり、アナキンは間違った行動をとり続けてしまっていた。ルーカスが新三部作で描きたかったのは「善人が悪人になってしまふ様」であると言い、旧三部作とは徹底的に異なるものを作ろうとしたことがうかがえる。

私は観客に、アナキンが基本的に独占欲の強い人間なんだということを根本的に理解してほしいんだ。彼は自分の母親やパドメをそばにおいておきたかった。しかし、それは叶わない。アナキンは、死から大切な人々を守る力を手に入れたかったんだ。これは古典的な、神話的なモチーフだね。三途の川まで行き、死から人を取り戻す。彼は悪と手を結んだ。妻を死から救うためにね。これは彼にとつては、悪と協定を結ぶに足る、充分な理由だったんだよ。しかし、これは逆にパドメを死に至らしめることになってしまった。なぜなら、アナキンは権力と強欲へと道を転げ落ちてしまい、それはパドメが最も

望まないことだったからだよ。 五八

アナキンはオビワンの敗れた後、彼に向って「あんたが憎い」と叫ぶ。それに対しオビワンは「お前を愛していた」と返す。アナキンはオビワンの思いを考えることなく一方的に恨んでいたのである。それはまさしく子供の反抗期で、ルーカスはアナキンの顛末を通じて反抗期にとどまることを良くないものとして描いた。「家族を大切にする」ために、「父なるもの」を知ることが求められるのである。それが単に自分を苦しめるためのものでなく自分を成長させるためのものだ。この時のアナキンは気づけなかった。

第二節 英雄の誕生と家族愛の勝利

アナキンの物語には非常な現実が描かれる。愛するものへの執着は決して良い方向へと導いてはくれないという悲しみが付きまといている。新三部作はバッドエンドとして幕を下ろすのだが、一方で旧三部作の根底にあったのは明快な英雄神話であり、ルーカは間違いを犯すことなく英雄としての道をたどった。

ルーカは農場を営む夫婦のもとに預けられ、愛情をもって育てられるが、同時に宇宙に出てパイロットになりたいという望みを阻害されていた。この夫婦はルーカに農場を継がせようとしていたのである。というのも、彼らはルーカの父親

が戦争の果てに死亡したと知らされており、ルーカには同じ道をたどってほしくないと考えていたためだ。愛するものを守ろうとする「母なるもの」としての愛によって生かされていたのである。しかしルーカは宇宙で戦うことに憧れを抱く少年であり、そんな彼の前にオビワンが姿を見せたのは都合のいいことだったといえる。ただこの時のルーカもまた自分を育ててくれた夫婦に愛情を持っており、自分の夢をあきらめてでも家督を継がなければならないと考えるのは無理もないことだった。そんなルーカの平穩は、この夫婦が帝国の兵士によって殺されたことで崩壊する。

キャンベルはモノミスの冒頭に「冒険への召命」と「召命拒否」を設置している。英雄となるものは偶然としか思えない失敗から運命の入り口に入っていく、突然冒険の始まりに立たされることとなる。運命は英雄を冒険に呼び寄せるのである。しかしながら時として、英雄の側がこれを拒否することがある。キャンベルは「面白くない展開」というが、現実の人生ではよくあることで、別に神話においても珍しいものではない。そうなってしまうと冒険は消極的なものになってしまう。ルーカはまさしくこの例に従って一度は冒険から逃れようとする。しかし運命がそれを許さず、彼を強引な手段で冒険に駆り立てることとなる。この出来事により、ルーカは「母なるもの」からの自立に成功する。

幼少期において、父と母は守護者として子のそばに立つ。英雄は幼少期のエゴを捨てねばならないのだが、親に固着す

ることでそれを捨てようとしなくなる。召命拒否のもつともな理由がこれであり、外の世界へ生れ出るにあたり障壁となる。すなわち「父なるもの」「母なるもの」を象徴的に殺さなければならぬという話になるのだが、すでに振り返った通り、アナキンはここで躓いている。ルークが異なっていたのは、ここで家族と別れる決意が明確にできていたことである。というのも、ルークはこれ以降この件を話題に出すことはなく、唐突な別れに対し覚悟を決めていた。アナキンは母を失ったことをずっと引きずっていたことと比べると肝がかなり据わっている。農場を継ぐはずだったルークの目的は即座に、帝国と戦いこの時点では父の仇であったベイダーを倒すこととなった。この悲劇によってルークは冒険の始まりに立つことができ、モノミスの円環に乗ることができたのである。

神話的英雄の資格は死や失うことを恐れる者は持つことができないう、とキャンベルは言う。アナキンは「母なるもの」を失うことを恐れたが、ルークは「母なるもの」の死を受け入れ前に進むことを決めた。イニシエーションの始まり方という点で既に違いが見えてきている。

こうしてルークは不本意とはいえ銀河を救う英雄というかつて夢見た姿へと向かい始める。しかしその甘い理想は碎かれることとなる。『帝国の逆襲』の中盤で帝国の罠にはまり捕まった仲間を助けるために、ルークは修行を中断して仲間のもとに向かうのだが、そこにはベイダーが待ち構えていた。

ベイダーは自分こそが父親であるという真実を明かしルークに仲間になれと迫るがルークは拒絶する。ルークにとつて、仇だと思っていた人物が実の父親だったというのは相当にショックな出来事だった。英雄の父を持つという大義名分を掲げ、理想像となっていた父の仇を討つための冒険が、ベイダーと父親が一致してしまったことで「父殺し」という重いテーマを持つものとなってしまう。この時のルークは「父殺し」を拒否して逃亡する。

父と戦わなければならないという事実は、ルークの幼い憧れを破壊した。イニシエーション儀礼においては、子供は子供らしさを放棄して大人になることを強制される。幼子的人格と精神において死に、責任ある大人としてよみがえることが求められる。ルークの中に父と立ち向かう心が芽生え、「父なるもの」を打倒する準備が整ったことで、ルークは幼児期から脱した。強い力への憧れを捨て去ることができなくなったアナキんと明確に区別される要素であり、その違いがルークを勝利へと導き「象徴的親殺し」を成功させたのである。

「母なるもの」からの自立や死と失うことへの恐れの有無、幼児期の憧れからの脱却など、ルークとアナキンは対比させられる部分が多い。六作を通じて見たとき、英雄の形成に必要な要素を観客は自ずと理解できるだろう。ルークはこのような道筋を経たことで自我の確立を果たすのである。

そしてそれはアナキンが再び自我の確立に挑むきっかけとなった。ルークは父を殺さず救うことを選ぶ。ベイダーと剣

戟を交えることで、その中に善の心が残っていると確信したのである。なによりベイダーと戦うことは、ルークにとつて「悪にとらわれるとはどういうことか」を知ることだった。

これらを踏まえることで、ルークは「父との一体化」のおおりに父親と同じ地平に立つことができたといえる。それはルークが皇帝に向けて放った「僕はジェダイだ。かつて父がそうであったように」というセリフに込められている。父を理解したことが、ルークを父との和解に向かわせたのである。その決意によつて、ベイダーの中に封じ込められていたアナキンの意思がよみがえる。アナキンは自分が死ぬことを顧みず息子を助けた。「死を恐れる」ことを克服し、自身を機会によつて生かしていた皇帝から自立してみせた。彼はここにきてようやく英雄としての使命を果たす。人間性の奪われたロボットは自身を動かすシステムに抗つて自我を確立させたのである。

ルークは父への愛をもつて「父なるもの」を乗り越えた。そこに殺害をもくろむ憎しみは無い。アナキンは一方的な憎しみを抱いていたが、それが間違いを引き起こした。「象徴的親殺し」と現実の親殺しの違いはそこだろう。家族に抱く思いはそのままイニシエーションに反映される。ゆえに「家族の大切さ」を説くのである。

ルークが機械の仮面を外したことで、アナキンは息子の前で初めて素顔を見せる。その時の彼は悪にとらわれていたベイダーとしての姿から脱却していた。神話やおとぎ話におい

て、呪いによつて別の姿に変えられてしまい、救済の過程を経て元の姿を取り戻すというモチーフはよく見られる。機械の仮面はアナキンの自我が確立されていないという本質を覆い隠していた。それが取れることでようやく救済のイメージへと向かえるのである。

この展開をもつてベイダーは死亡する。救済されたとはいえ、死を避けることはなかった。ルーカスは物語の終了を示すためにベイダーを死なせなければならぬと考えたのである。キャンベルは「英雄伝説の最後は死あるいは離別の場面で終わり、ここに英雄の生涯の意味が集約される」という。

ルークにとつての「離別」は父の愛の証明と素顔を観測することによる「父の探求」の終結であり、アナキンの「死」は自分を閉じ込めていた悪の仮面からの解放により「家族愛」を取り戻したことで、そう導いてくれた息子への感謝による贖罪が描かれる。

アナキンの生涯の大半は悪に染まったものであったが、その最期にはまぎれもなく英雄としての姿があり、そのために家族の愛は欠かせないものだった。かつてアナキンを説得しようとしたパドメは死の寸前までアナキンに良い心が残っていることを信じ、息子にあとを託した。オビワンはアナキンを倒した際、彼に「おまえを愛していた」と言い放つ。そしてルークは悪しきベイダーを殺すのではなく、愛ゆえに父を救うことを選ぶ。これらが積み重なった末アナキンは息子からの愛によつて帰還し、英雄としての役目を果たす。

『スター・ウォーズ』は我々に、家族を持ち愛すること、「家族の大切さ」を訴えてくる。ルーカスは言う。

そして、私が彼らに伝えたいメッセージとしましては、人間は共存しながら、助け合いながら生きてこそ初めて良い人生が築かれるというそのメッセージをですね、伝わってくれればいいと思います。

結び

私は文化を破壊するもつとも大きな要素は、少年・少女たちが夢を持たずに成長することだと思う。色々と考えた末に到達した結論であるが、それはおとぎ話や神話のことで、むかしむかしの物語、例えばオデッセイ物語や、子供のとき耳を傾けたおとぎ話である。

本稿では『スター・ウォーズ』シリーズが描く親子関係について論じた。ジョージ・ルーカスという映画作家の「現代のおとぎ話を定義付けたい」という思いから作られたこの一大神話を神話学の視点から再考することで、ただ鑑賞するだけでは得られない発見があったと確信している。

第一章では神話というものについての考察をおこなった。ここで何度も指摘されていたように、現代において神話の影響力は弱まってしまっている。神話が我々に語り掛ける「教

訓」は、決して過去のものとして一蹴されてよいものではない。人間それぞれの心の奥底には神話の人物たちが住み込んでおり、それとの対話を怠ると時にとてつもない事件が起こることもある。我々のすべきことは「自分の神話を見つける」ことであり、それは自分の内面に迫るために重要なことである。しかしくれぐれも、心の拠り所を求めた末にカルト教団にのめりこむことが無いよう気を付けたい。

この前提を踏まえ、キャンベルが『千の顔をもつ英雄』にて定義した英雄神話の構造について見ていくこととなった。英雄の冒険は「出生」「試練」「帰還」の三つに分けられ、多くの物語はこの形式を踏襲している、というものである。世界各地の神話は似通った構造を持つものの、その細部は時代や土地によってさまざまにパターンを持っている。その姿はプロテウスのようにあらゆる姿をとって現れるが、神話は語り掛ける者によって異なる答えを提示し、こちらが質問を誤ればその問答は意味のないものになる。そのため、神話を学ぼううえでそのイメージを自身のなかで確立させておくことが求められるのである。

そして今回、「父と子」の英雄神話を主に見ていくにあたり、キャンベルによる「父」の役割についての記述と、息子が父を敵視する感情としてフロイトが定義した「エディプス・コンプレックス」に触れておく必要があった。神話において英雄が直面することとなる「父なるもの」との対決を理解することで、現実での自身のふるまい方について改めて考え直

すことができるだろう。河合隼雄による秀逸な例えを見て、自分が一度敬意を払うべき相手に対しての行いが正しいかどうか見つめなおしたい。

ここまで神話について考察したところで、第二章でようやく主題である『スター・ウォーズ』の物語について振り返ることとなった。本稿では「家族の物語」を中心に振り返り、勸善懲惡を説く英雄物語と惡に転落する悲劇を対比させた。ルークを主人公とした旧三部作はキャンベルのモノミスに忠実であり、試練を乗り越えて父を救う英雄となる様が描かれた。一方でアナキンを主人公とした新三部作は「母なるもの」への執着から脱却できなかったために憎しみにとらわれ人間性を奪われるところまで行きついでしまった、英雄神話の負の側面を描いたものであった。そして六作を通してみることで、この悲劇が救済の物語に変化するということについて論じた。

シナリオを振り返ったことで、第三章ではこの一大神話に既存の神話の要素を照らし合わせつつ、二つの物語の対比から得られる教訓について探っていった。二人の主人公は同じ課題に異なる答えを出し、それによって明暗が分かれることとなる。「何が正しくて何が間違っているのかを教えたかった」とルーカスが言うように、家族に対する考えの違いがもたらした差異を考察することで、我々へのメッセージが何であるかを解き明かすことができる。それは確かに神話の内容に即したものであり、『スター・ウォーズ』が現代の神話と

しての役割を保持していることを明らかにするものであった。ここで提示された「象徴的親殺し」について、我々は今一度考えていかなければならない。実際問題、家族間での殺人は後を絶たない。河合隼雄の言うように、それは「象徴的親殺し」を理解しないために起きた身勝手な行為であり、神々の行いのように人間が行っているものではない。こうした事態を避けるため、これからも神話の教えを大事にしていくことが求められるのである。

『スター・ウォーズ』シリーズはルーカスの手を離れた後も制作が続いており、二〇一五年から二〇一九年にわたってエピソードVII〜IXが公開され、家族の物語は異なるクリエーターによって更なる発展を見せた。それはルーカスの作った六作が受け入れられ、今後も語り続けられていくことの証左と言える。本人の望み通りスター・ウォーズは現代のおとぎ話および神話としての地位を確立しており、そこに含まれたメッセージはこれからもたくさんの人々に届けられていくことだろう。それによって、今後も神話の教えが伝搬していくこととなる。

- マーク・クラーク『STARWARS FAQ』キネマ旬報社、二〇一六年、五〇頁。
- 『SCREEN』二〇一〇年一月号、近代映画社、一〇頁。
- 蔵持不二也『世界でいちばん素敵な神話の教室』三才ブックス、二〇二〇年、一四頁。
- 河合隼雄『神話の心理学 現代人の生き方のヒント』岩波現代文庫、二〇一六年、二二頁。
- 同書、二二頁。
- 同書、一二〜一三頁。
- 同書、二二頁。
- キャロル・S・ピアソン『英雄の旅』ヒーローズ・ジャーニー 一二のアーキタイプを知り、人生と世界を変える』実務教育出版、二〇一三年、六〜七頁。
- 河合隼雄『ユングの生涯』レグルス文庫、一九七八年、七八頁。
- 『神話の心理学 現代人の生き方のヒント』一三頁。
- 『ユングの生涯』七八頁。
- 『神話の心理学 現代人の生き方のヒント』一四〜一六頁。
- 同書、一六頁。
- 山田仁史『新・神話学入門』朝倉書店、二〇一七年、一八四頁。
- ジョーゼフ・キャンベル『千の顔をもつ英雄』ハヤカワ文庫、二〇一五年、下巻二九六頁。
- 同書上巻、五四頁。
- 同書下巻、八九〜九十頁。
- 同書下巻、二九四頁。
- 『新・神話学入門』一八二頁。
- 『千の顔をもつ英雄』上巻、一七〜一八頁。
- 同書下巻、二七七頁。
- 同書下巻、九〇頁。
- 同書下巻、二七七〜二七八頁。
- 同書下巻、二七八〜二七九頁。
- 同書下巻、二九九頁。
- 同書下巻、二一四頁。
- 同書下巻、一三八頁。
- 同書下巻、一三九頁。
- 『英雄の旅』ヒーローズ・ジャーニー 一二のアーキタイプを知り、人生と世界を変える』八八頁。
- 『神話の心理学 現代人の生き方のヒント』一二〜一三頁。
- 『千の顔をもつ英雄』上巻、二二頁。
- 『神話の心理学 現代人の生き方のヒント』一四頁。

ジョーゼフ・キャンベル『神話の力』ハヤカワ文庫、二〇一四年、四四頁。

『神話の心理学 現代人の生き方のヒント』二二五～二六頁。

東義真「『スター・ウォーズ』が内包する異文化共存思想の研究―米国人映画作家ルーカスの思想と映画表現の可能性―」

https://kitakyu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=254&item_no=1&page_id=13&block_id=431 (二〇二二年二月七日) 七一頁。

『STARWARS FAQ』五一頁。

クリス・テイラー『スター・ウォーズはいかにして宇宙を征服したのか』パブラボ、二〇一五年、六四六頁。

『千の顔をもつ英雄』下巻二九四、二九五頁。

デール・ポロック『スカイウォーキング』ソニー・マガジズ、一九九七年、二二二～二二三頁。

同書、二二〇～二二二頁。

『神話の心理学 現代人の生き方のヒント』二六頁。

「『スター・ウォーズ』が内包する異文化共存思想の研究―米国人映画作家ルーカスの思想と映画表現の可能性―」八八頁。

小野俊太郎『スター・ウォーズの精神史』彩流社、二〇一五年、五一頁。

「『スター・ウォーズ』が内包する異文化共存思想の研究―米国人映画作家ルーカスの思想と映画表現の可能性―」五二～五三頁。

『スター・ウォーズの精神史』六九頁。

ライダー・ウインダム、ダニエル・ウォーレス、アダム・プレイ、トリシア・パー『アルティメット・スター・ウォーズ 完全保存版大百科』学研プラス、二〇一五年、一四七頁。

ヒーローズ・ジャーニー
『英雄の旅 一二のアーキタイプを知り、人生と世界を変える』七二頁。

『神話の心理学 現代人の生き方のヒント』一六二頁。

同書、一六四頁。

同書、一六六頁。

同書、一六七頁。

同書、一六七～一六八頁。

『神話の力』三〇五頁。

ヒーローズ・ジャーニー
『英雄の旅 一二のアーキタイプを知り、人生と世界を変える』七四頁。

『千の顔をもつ英雄』上巻二〇二頁。

佐々木信幸「ジョージ・ルーカスと『スター・ウォーズ』―映画に表現される神経症傾向とその治

癒過程―『日本病跡学会雑誌』第六三号、日本病跡学会、二〇〇二年、八二頁。

『キネマ旬報』二〇〇五年七月下旬号、キネマ旬報社、四六頁。

同書、二八頁。

『千の顔をもつ英雄』上巻八三頁。

同書上巻、九三頁。

同書上巻、九八頁。

「『スター・ウォーズ』が内包する異文化共存思想の研究―米国人映画作家ルーカスの思想と映画表現の可能性―」七四頁。

『スター・ウォーズの精神史』四一頁。

『神話の力』二六五頁。

M. L.フォン・フランツ『おとぎ話のなかの救済―深層心理学的観点から』日本評論社、二〇〇四年、三〇四頁。

同書、一一二頁。

『STARWARS FAQ』二四九頁。

『千の顔をもつ英雄』下巻二四四頁。

『キネマ旬報』一九九九年七月上旬号、三五頁。

『キネマ旬報』一九七八年七月上旬号、二五〇―二六頁。

参考文献

ジョーゼフ・キャンベル『千の顔をもつ英雄』ハヤカワ文庫、二〇一五年。

ジョーゼフ・キャンベル『神話の力』ハヤカワ文庫、二〇一〇年。

河合隼雄『神話の心理学 現代人の生き方のヒント』岩波現代文庫、二〇一六年。

河合隼雄『ユングの生涯』レグルス文庫、一九七八年。

キヤロル・S・ピアソン『英雄の旅 一二のアーキタイプを知り、人生と世界を変える』実務教育出版、二〇一三年。

山田仁史『新・神話学入門』朝倉書店、二〇一七年。

M. L.フォン・フランツ『おとぎ話のなかの救済―深層心理学的観点から』日本評論社、二〇〇四年。

蔵持不三也『世界でいちばん素敵な神話の教室』三オブックス、二〇二〇年。

デーブル・ポロック『スカイウォーカーキング』ソニー・マガジンズ、一九九七年。

マーク・クラーク『STARWARS FAQ』キネマ旬報社、二〇一六年。

クリス・テイラー『スター・ウォーズはいかにして

宇宙を征服したのか』パブラボ、二〇一五年。

小野俊太郎『スター・ウォーズの精神史』彩流社、二〇一五年。

ライダー・ウィンダム、ダニエル・ウォーレス、アダム・ブレイ、トリシア・パー『アルティメット・スター・ウォーズ 完全保存版大百科』学研プラス、二〇一五年。

東義真「『スター・ウォーズ』が内包する異文化共存思想の研究―米国人映画作家ルーカスの思想と映画表現の可能性

https://kitakyu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=254&item_no=1&page_id=13&block_id=431 (二〇二二年二月七日)。

・佐々木信幸「ジョージ・ルーカスと『スター・ウォーズ』―映画に表現される神経症傾向とその治癒過程―」『日本病跡学会雑誌』第六三号、日本病跡学会、二〇〇二年。

『SCREEN』二〇一〇年一月号、近代映画社。

『キネマ旬報』一九七八年七月上旬号、一九九九年七月上旬号、一九九九年七月上旬号、二〇〇五年七月下旬号、キネマ旬報社。

二〇二二年度 卒業論文 優秀作

フェティッシュ神から見る宗教起源

政 田 龍 太 郎

コメント

澤 井 治 郎

本稿は一八世紀フランスの思想家シャルル・ド・ブロスが提唱したフェティシズムという概念をとりあげ、この概念がその後の人類学、民族学、宗教学などの人文諸学の発展にどのような意義をもったのかを明らかにしている。

ド・ブロスの提唱したフェティシズムは呪物崇拜とも訳され、現代ではアニミズムやトーテミズムなどと並んで、宗教の起源論の一つとみなされている。また、ド・ブロス以後、経済学や心理学においても転用され、一般には、性的嗜好を表す「フェチ」としてよく知られている。

第一章では、ド・ブロスの著書『フェティッシュ諸神の崇拜』によって、神ではなく物自体を崇拜することがフェティ

シズムであり、それが宗教の起源だと提唱されたことを確認している。第二章では、中世から近代のキリスト教による、物の崇拜を戒める言説を取りあげ、キリスト教社会においてフェティシズム論がいかに批判的に見られたかを浮き彫りにしている。第三章では、強い批判を承知の上で、あえて物の崇拜が宗教の起源であると主張した意味を考察している。結論として、フェティシズム論は、神への信仰とは質的に異なる信仰形態があることを明らかにし、その後のアニミズムやトーテミズムなどのように、人類の文化や社会や宗教を新たな概念で捉える学問の扉を開く画期的なものだった、としている。

フェティシズム概念の時代状況や影響関係を丹念に読み込み、学問史における意義を明らかにしたことは高く評価したい。その意義をなお一層明確にするには、アニミズムやトーテミズムなどを提唱した後の学者が、フェティシズム論をどのように踏まえているか具体的にとりあげられれば良かったかもしれない。とはいえ、こうして宗教の概念を検討することは、自らの普段の信仰を省みる機会にもなったはずである。これからも信仰と見識を深めつづけることを期待したい。「物は大切に」。

序

宗教には、儀式や儀礼一つとつても、内容自体には様々なものがある。神を信じる宗教もあれば、「神」の定義次第では神が存在しない宗教もある。宗教は今日に至るまで、その膨大な数を発展させながらも人間社会と結びついて密接に存在している。私は天理教という宗教の信者であり、教会で生まれ、幼い頃から宗教を身じかに感じながら育った。また、大学では世界の宗教に触れ、そのうちに人類最初の宗教に興味を持った。そこで本論文では、言語学の立場から宗教の起源について検討した、フランスの啓蒙思想家シャルル・ド・ブロスのフェティシズム、フェティシユ神の信仰をめぐる議論を中心に上げていく。

まず、ド・ブロスの主張には「(・・・)人間の観念の自然な進歩とは、感覚的対象から抽象的知識へと移行するのであり、「(・・・)人間に不可視の創造主から人間の持つ可視的な本性へと下降して行くのではない」(ことあるように、彼は当時主流だった、あらゆる宗教の基礎は唯一神であるとするような、キリスト教的プラトン主義的な宗教観には賛同していなかった。そこで、この論拠を批判するために宗教の起源は何であったかという問いを改めて示し直す必要があり、その代案としてド・ブロスは、アフリカ大陸などに現存する野生民族あるいは古代民族の信仰形態から、フェティシズムという新たな宗教起源説を提唱することになる。つまり、ド・ブロスのフェティシズムとは、プラトン主義的解釈を批判す

るために創始された論理であるということになる。

しかしド・ブロスは、「要はフェティシズムは物質への直接崇拜であり、事物に象徴された象の崇拜ではないという点である。ゆえに人間精神の自然的な進歩からすれば、抽象化のできない民族の信仰であるフェティシズムの方が偶像崇拜よりも古い信仰、すなわち宗教の起源とされる」(こと、フェティシズムが人類史における宗教進歩の原初の形態とし、この主張に反対する意見に対して熱心に論議していくことになる。その結果、ド・ブロスのフェティシズム論は、後の宗教学や比較民族学の歴史に大きな足跡を残すことになる。本稿ではさらに、十八世紀のヨーロッパ啓蒙社会における宗教の起源という問題に対して、多くの批判を受けながらも、シャルル・ド・ブロスのフェティシユ論がどのような意義を持つて展開されて行ったのか、という点を考察していきたい。

まず第一章では、西アフリカの黒人民族やその他野生人に現存する土着信仰を元に、シャルル・ド・ブロスのフェティシズムについて解説する。

第二章では、当時のヨーロッパ啓蒙社会からの批判にはどのようなものがあつたのかを中心に、シャルル・ド・ブロスの主張とあわせて考察していく。

さらに第三章では、このフェティシズムが、当時のヨーロッパ社会の中で、多くの批判を受けながらも当時の宗教の起源の問題に対してどのように展開されていったのかについて検討し、結論として、フェティシズムが宗教起源説としてど

のような意義を持つて受け入れられていったかを考察したい。

第一章 フェティシズム

第一節 シヤルル・ド・ブロスのフェティシズム

フェティシズムとは、フランスの啓蒙思想家、シヤルル・ド・ブロス（以下ド・ブロス）が、一八世紀には画期的であった、現在で言うところの比較宗教学の立場から、アフリカ大陸に残存する土着の信仰を研究し、そこで行われていた原初的自然神（フェティシユ）信仰を表すために造ったド・ブロスの造語であり、「呪物崇拜」とも訳される（三）。

「フェティシユ」の語源は、一五世紀末ポルトガルの商人たちがアフリカで交易を行おうとした際、その現地人の宗教およびそれに関わるモノを「フェティソ」と呼ばれたのが始まりとされている。この「フェティソ」は、ポルトガル語で「魔術・呪術」を意味する一般語としてポルトガルの商人が名付けたものである。その後ヨーロッパ文化圏において魔術・呪術ではなく「宗教概念」として「フェティシユ」という言葉が一般共通語として発展するようになり、フェティシユが一七世紀から一八世紀中頃にかけて、ヨーロッパの知識人の間でアフリカの信仰実践一般を示す言葉として定着していくことになる。そして一七六〇年に公刊されたド・ブロスの『フェティシユ諸神の崇拜』では、フェティシユを崇拜する宗教の事を「フェティシズム」と呼び、学術用語として確立されるようになる。

この「フェティシズム」は後に、マルクスの『経済学批判』や『資本論』において労働者が生産する価値を商品の価値と置き換える商品フェティシズム、またフロイトの『性理論三篇』では、身体性器を下着などの性的嗜好と取り違える精神フェティシズムなど、フェティシズムが学術的用語として確立されてから、ド・ブロスの宗教フェティシズムとあわせて主に三つの領域が開発されるようになる。しかし本論文ではあくまでド・ブロスの宗教フェティシズムについて当時のヨーロッパ社会でどのような影響をもったかを問いとして進めていくことにする。

先述したようにフェティシズムにはこれまで宗教・経済・性的の三種の領域が開発されてきたが、この三種のフェティシズムは共通して「真実の誤認」がされているのである（四）。

つまりは、本来の価値が否定あるいは隠蔽され、モノや全く別のものを代わりに真実あるいは価値と見なす事である。本来信仰すべきであるはずの神を信仰対象とせず、モノである木片などを崇拜する宗教フェティシズム、他にも人間の活動の代わりに商品や貨幣を崇拜する経済フェティシズム、本来の性欲の代わりに下着や足などを性的欲望の対象とする性的フェティシズムがあるように、この三つのフェティシズムには本来取り違えるはずのない価値のある真実を取り違える事で起きるといふ事である。

ド・ブロスは、当時のアフリカ大陸やアメリカ大陸の研究から、古くから残存するモノや動物（フェティシユ）を崇拜

対象とする現地の土着信仰をフェティシズムと名づけたが、このフェティシズムは主にアフリカ大陸の黒人民族たちの間で広く信仰されており、その崇拜対象であるフェティシユに対し、ド・ブ罗斯は「そのどれもが黒人にとってのごとく神であり、聖なるものであり、また護符である。」(五)と述べている。アフリカの大半の民族は人間を神格化し、キリスト教のような偶像崇拜を行うよりまず先に、人や神ではなくモノや動物のような自然物を眞の崇拜対象としているのである。

ド・ブ罗斯によれば、彼らにとつてフェティシユとはあらゆる類の厄災に有効な手立てであり、人間を守ってくれるものとして捉えられている。そのため彼らは、そのフェティシユのために祭壇を作り、祈りを捧げ、フェティシユのためであれば生贄を供えたりもする。また大いなる崇敬を持つてフェティシユを身につけ、重要な場面ではいつもフェティシユに対して伺いを立てたりもする。こういった民族は厄災などに対する畏怖心あるいは強すぎる信仰心から自分達の気に入った動物を、願いを叶えてくれる最愛の守護神として崇める。そのため動物が居なければその辺の石や木片などを選んだり、彼らにとつて目を引くものであれば新たなフェティシユとして何でもかんでも選んでしまうのである。彼らの神々の数は非常に多く限りがないとされる。

第二節 フェティシユ

ド・ブ罗斯は、フェティシユについて著書の『フェティシ

ユ諸神の崇拜』の中で、

これら神的なフェティシユは、各民族や各個人がそれぞれ選び、神官たちに儀式で聖別してもらう任意の物的対象にほかならない。なにかしらの樹木であつたり、山であつたり、海であつたり、一片の木材、獅子の尻っほ、小石、貝殻、塩、魚、植物、花、それに牝牛、牝牛羊、象、羊といったある種の動物であつて、つまりは想像しうる同種のものすべてである(六)。

と述べている。こうしたフェティシユは主に個人の自宅の敷地内や戸口に置かれたり、儀礼として祭壇が準備されていて、黒人民族が雨乞いを祈願する際には祭壇の前に空の水差しを置いたり、戦時には勝利を願うために武器を置き、また獣肉や魚肉が欲しい時には動物の骨を置いたりフェティシユに対してお供物を用意する事で崇拜と信頼を誓い、自分達の願いが間違ひなく叶うものだと思つているのである。

各民族や各地域によつて独自のフェティシユを持つことが多く、ある動物をフェティシユにしている場合、人々はその動物の肉を決して食べたりはしない。仮にもそこでその動物を殺してしまつた場合、許し難い重罪と捉えられ、そしてそれが外部の人間の場合にはその地域の人々の怒りを買うことになる。また中にはフェティシユに対して畏怖や尊敬の気持ちから自分たちのフェティシユを直視できない人々もいる。他にも各地域に共通のフェティシユには海や山などといつ

たフェティシユも存在する。例えばヨーロッパの商人がアフリカの（セネガル）海岸近くに住む人間と交易をしようとした際に、船が上がってくるように現地の人に頼んだが、彼はなにを言われても船に上がることはなかったという。なぜなら船の下にある海が彼にとつてのフェティシユであり、自分の神を見たものは誰であれその場で死ぬというその地域で広まっていた一つの信仰が存在していたからであるとされている（七）。また山や樹木をフェティシユとして信仰している民族であれば、そこでもし誰かが木を切り落としたり、山の形を損なうような事があるものなら、罰として間違いなく死ぬことになるのである。

さらには畏怖や信心の強さから、個人で独自のフェティシユを持つことも多い。自分の家の守護神として、また護符として身につけることでフェティシユが自分の身を守ってくれると信じているのである。

オランダ人であるピーター・デ・マールレの航海記によれば、アフリカ民族の子供は生後二ヶ月になった時、身体に木の皮でできた網状のものを着せる。そしてそこにたくさんのフェティシユをつけ、子供の手足にはビーズひもを、髪の毛には小さな貝殻をつける。そうすればフェティシユを纏ったネットを身につけている限り、子供は悪魔に捕われたり、連れ去られたりすることはないと考えられている。さらに首周りのフェティシユは嘔吐を防ぎ、髪の毛のフェティシユは転倒から身を守ってくれると考えられている。このように彼らは様々な効能を持つフェティシユをたくさん身につけるのである

（八）。

第一節で示したように、彼らは自分達のフェティシユを何か重要な決め事であったり、あらゆる厄災を予防するための手立てとして見つけようとする。それは犬や猫などの動物だろうが、その辺りに転がっている石や木片ですらも自らの神としてしまうという非常に行き当たりばったりな性格を帯びているため、彼らの神々の数は非常に多く限りがない。さらにはこのようなフェティシユのもう一つの特徴として、彼らは自分達を成功へと導いてもらえるフェティシユを神として選び、もし事が上手くいけばその後もずっと神として供物を捧げ続け崇め奉る。しかしもしもそのフェティシユが願いを叶えてくれなかったり、効力が無くなつて古くなつたとすれば、そのフェティシユは無用の道具として拒否され、元の場所へ打ち捨てられてしまうのである。彼らは神として有効性が無いと判断した場合、それまで神と崇めていたフェティシユを簡単に捨ててしまうのである。

ド・ブ羅斯は、アフリカによく広まっているこのフェティシズムが宗教の起源として極めて古い宗教であると捉えた。その理由としてド・ブ羅斯は「今日世界で最も迷信深い民族である黒人が行っていることと、かつてその時代に最も迷信深い民族であったエジプト人が行っていたことが、慣習の点ではやはりほとんど同じであることがわかる。」（九）としている。ド・ブ羅斯は著書の『フェティシユ諸神の崇拜』のなかで、アフリカ内部で最も広く信仰されているのが蛇のフェティシユ信仰であり、その信仰の実態と似たような慣習がエ

ジプトのヒエログリフの中に確認できるという事から、ド・ブ羅斯は現在アフリカで生活する民族の宗教とかつての古代民族の宗教と同じであったという事を紐づけて、フェティシズムこそが宗教の起源であると提唱している。

先述したように、彼らアフリカ人にとってフェティシユとはモノや動物を出会い頭に神と崇め、望みを叶えてくれなくなつたとすれば簡単に捨てられてしまう神なのであり、これは人が自己の神を自分たちで作らあげ、そして願いを叶えてくれなくなれば最後は人間の手によって捨てられてしまうというフェティシズムの特徴でもあり、人間と神は崇拜と攻撃の交互的關係性が示されているのである。しかし神を絶対的創造主として信仰する西欧のキリスト教徒にとってはこのフェティシズムの神の概念が異端に見られた。つまりこのフェティシズムの崇拜と攻撃の交互的關係性はヨーロッパ人の抽象的な一神教による神の概念とは非常にかけ離れているものであり、フェティシズムはキリスト教圏である西欧のヨーロッパ人たちから度々批判の対象とされてきた。

次章では、そうしたフェティシズムの物神崇拜の批判の歴史を紐解きながら、主にキリスト教側がどのように批判し、神とモノの位置付けを展開していったのかに焦点を当てて論じていく。

第二章 フェティシズム批判

第一節 偶像崇拜とフェティシズム

初期のキリスト教の時代から、偶像崇拜は物質性を評価する際に議論の焦点となってきた。フェティシズムが比較的新しい概念であるのに対して偶像崇拜には長い歴史があり、その意味も時代の流れの中で変化してきた。ド・ブ羅斯は一般的な偶像崇拜とフェティシズムの違いについて、

フェティシユではそのモノ自体に力があると信じられているのに対し、偶像においては、力の源は偶像の背後にあるそれが表象するなにかであるということ。言い換えれば、フェティシズムにおいては神とモノは同一視できるのに対し、偶像崇拜においてはモノと神は分けて考えなければならぬということである(二〇)。

と説明している。つまりフェティシズムの場合、人間に加護を与えようとする物神の力の源は、抽象的な神からではなく、モノそのものから派生していると考えられており、モノをそのまま神として、モノ \parallel 神として直接的に崇拜している事になるため、ここにフェティシユの特徴として聖性と物質性の融合が述べられているのである。また同時に偶像崇拜との違いも指摘されており、偶像における力の源はその背後にある表象された目に見えない何かであるという点である。つまりは、偶像崇拜においては神とモノとは分けて考えられるべきであり、聖性と物質性は本来混ぜ合わせてはいけないという特徴が説明されているのである。

しかし初期のキリスト教において、偶像崇拜は聖像、聖画、

聖遺物などが靈的効力を持つものとして一般的に受け入れられており、当時は神とモノの区別がはっきりとは確立されておらず、聖性と物質性の論点は、偶像崇拜の本質とは認識されていなかったのである。

あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない。あなたはいかなる像も作つてはならない(中略)あなたはそれらに向かつてひれ伏したり、それらに仕えてはならない(一一)。

これはヘブライ語聖書「出エジプト記」にある偶像崇拜に関する戒律である。この戒律には主に二つの禁止が記されており、一つは他の神を崇めてはならないという禁止、二つ目は像を造つてはならないという禁止がなされてある。これは、元来キリスト教が偶像崇拜を禁止している根拠でもある。またキリスト教では「神」、「世界」、「人」のカテゴリが世界には存在し、後者の「世界」や「人間」は全て神によって造られたものであるという教えがある。古代キリスト教会の教父テルトリアヌスは、神の被造物であるはずのモノや自然物を素材として偶像を作るとは、間違つた神を表象することであり、その偶像を信仰するという事は唯一神である創造主以外のものに信仰を捧げることになるとして、神の被造物であるモノを使つて偶像を作りあげてしまう時点で間違つた神を表象してしまつているという事を偶像崇拜の最大の問題として指摘している(一二)。

そのため、聖画や聖遺物などのモノを通して神へ祈りを捧げようとする中世カトリック教会の信仰はプロテスタント派からは見れば、聖性と物質性の近さからフェティシユ的要素を含んでいるとして、「フェティシズム」と批判される事にもなる。単なる物質を神として崇めようとする物神化に陥つていふことからは、キリスト教から見れば偶像崇拜もフェティシズムもそこまで、明確に区別されるものではなかつたのである。

そして、一五二〇年代に起こつた改革派による宗教改革によつて、中世キリスト教会に対する偶像崇拜論がより活発に展開されることになり、モノを神の領域から排除しようとする偶像批判の動きが強まることになる。

そして本章ではキリスト教によるフェティシズムへの批判方法として、これまでほぼフェティシズムと同一視されてきたキリスト教の偶像崇拜が宗教改革を経て、どのような批判をされるようになったのかに焦点を当てて、キリスト教の物神化に対する批判として論じていく。

第二節 カルヴァンの神学

もともとキリスト教の教えの背景には、神によつて造られたすべてのモノは神の善性を受け継いでいるとされておられ、その造られたモノには神の力を媒介する器であるという見方があつた(一三)。そのため中世のキリスト教会においては聖画や聖像が靈的効力を持つていふとして一般的に認められていて、信仰の対象物に対してモノと神の精神を同一視する見

方は特に信仰する上では問題はないとされていた。

しかし宗教改革以降になると、キリスト教プロテスタント派の改革者たちが中世キリスト教会に対して、教会には目に見える物に囚われてしまうような悪習と迷信で溢れてしまっており、原始のキリスト教のようなモノより精神を大切にしようとする心に戻るべきであるとして、当時の中世キリスト教会の中で信仰されていた聖画や聖像に対する批判がされるようになる。この改革以降、宗教実践において偶像は精神とモノを融合してしまっているとして、聖画や聖像の使用は信仰の障害であるとして禁止し、偶像崇拜も一切を否定され、その聖画や聖像を打ち壊す者まで現れるようになった。

この宗教改革における偶像崇拜論の一番の論点は精神と物質の二元論の確立を目指そうとしたプロテスタント派の改革思想であり、キリスト教の実践において如何に神の領域から物質性を排除する事が出来るかが論点とされてきた。そして彼らは、原初の教えのようにモノの仲介なしに精神のみで信仰者が神に触れることを原則とする聖書主義（福音主義）を再び広め、信仰の内面化を推し進めていくことになる。ここでは新たな偶像論と共にこの時代を代表する宗教改革の思想家であるジャン・カルヴァン（以下カルヴァン）の神学論を中心に、如何にキリスト教の偶像崇拜が、フェティシユ要素を含んでいるかを取り上げる。

カルヴァンの偶像崇拜論の背景には、言わずもがな神の本質は精神的な領域にあり、すべてのキリスト教の崇拜も精神的なものであるべきとするカルヴァンの神学論がある。その

ため人間が勝手に作り出した神のイメージや力を、木や石などを使って神の姿をかたどるということは本来は間違ったやり方であり、真実の神のイメージを物質に帰して目に見える神として崇める事は偶像崇拜という迷信であるとした。

また、カルヴァンいわく「単に偶像を崇拜するのも、それを通して神を崇拜するのも何ら違いはない。神に捧げられるべき栄養が偶像に向けられたとき、それが何であるにもかかわらず、偶像崇拜が行われている」（二四）とされている。つまりは、崇拜の念が例え真実の神に向けられたものだったとしても、その間に偶像や聖画などの物的対象が現れた途端、それは偶像崇拜となり得てしまうとカルヴァンは説明している。このように、カルヴァンにとって崇拜対象にモノと神の精神を関連づける事やモノ自体に精神的な力が宿るといふ考え方は間違った信仰であるとして、モノに対するいかなる宗教的意義も否定された。

さらにカルヴァンは、人間が偶像崇拜をしてしまう根本的な原因を通じて、キリスト教徒の信仰の内面化を推し進めることになる。

カルヴァンいわく、人間には神を知り神を崇拜する事こそが存在意義であるとし、そのために神は人間に「宗教の種」を植え付けて、すべての人間は神を感じる能力が備わっている。しかし人間は皆その無数に感じ取ることのできる神を、自身が満足できるような形で物質的に勝手に作り出し、心の中で出来た奇妙な形の神々の創造を自らが許してしまっているのが偶像崇拜の起源であり、根本的な原因であると説明さ

れている(一五)。

モノに宿るなんらかの効力を認めていた中世のキリスト教会では、そのモノの力の根源が何からもたらされるのかによって、正しい教えと間違つてゐる教えとに区別をされていた。すなわち、モノ自体がもつ効力がキリスト教の神から来るものであれば正しい教え、逆にその根源が悪魔から来るものであれば邪教として捉えられていたのである。しかしこの宗教改革以降、偶像崇拜の根本的な原因としては、悪魔などの外部からの問題ではなく、本質的な敵は勝手に偶像を作り出してしまふ人間の心の弱さが迷いとなつて表れるのが問題であるとした。したがつてカルヴァンは、この宗教改革を通じてキリスト教徒にとつての正しい信仰には、物質を神の領域から排除し、信仰者が精神的な信仰をしなければならぬため、己自身の心が信仰の拠り所であると説明したと同時に、モノを崇拜するといった間違つた信仰に傾倒しやすくなるのも人間の内面の弱さから来る問題でもあり、人間の心は信仰の障害ともなつてゐると説明している。

このように、キリスト教の偶像崇拜論は、プロテスタントの改革者らによつて大きく意味が変わつていくことになり、フェティシユにもあつた聖性と物質性は、はっきりと区別され、モノ自体に聖性を見出すこともキリスト教の中では間違ひであると指摘された。その意味でいくならば、フェティシズムも偶像崇拜も共に否定的な意味として批判的に捉えられたのである。

しかし言うなれば、この偶像崇拜およびフェティシユのよ

うな精神と物質を融合しようとする概念は、宗教改革の中で批判として捉えられることでキリスト教の中で精神と物質という二元論の枠組みを確立し、キリスト教が物質性を排除して自身が精神的宗教であるという形に位置付けるきっかけを作ることができた概念装置であると捉えることもできる。先述したように中世キリスト教会では、従来の宗教実践の中に聖性と物質性は分かれていなかったのが通例であり、そもそもキリスト教内においては、精神と物質を融合しようとするフェティシユ要素を含んだ偶像崇拜もそこまで問題とされていなかった。しかしそれに対して宗教改革以降のキリスト教がこの聖性と物質性の融合をしようとするフェティシユ的要素を批判することで、キリスト教は精神性と物質性の領域を分離することに成功し、その精神的な領域から徹底的に物質性を排除することで、プロテスタント派のキリスト教内では、宗教の本質は精神的なものであるとして前面に押し出すことができ、その後も位置づけを確保することができたのではないかと考える。このように宗教改革時代のプロテスタント改革派による偶像崇拜批判の展開も、単純に淘汰されるという事だけではなく、宗教概念を考える上で神とモノの関係性は切つても切れないものであることを示し、精神と物質という二元論の枠組みの中で、あえて否定的に捉えられることによつてキリスト教の宗教概念がより精神的なものであるという証明をする重要な役割を果たした。

第三章 シャルル・ド・ブロスの宗教起源論

第二章では宗教改革以降のキリスト教による偶像崇拜論を中心に、主にフェティシズムへの批判を説明した。そこではド・ブロスのフェティシズムとキリスト教の精神的な宗教との関係性は、ほぼ対極に描かれていたため、彼が一八世紀の啓蒙社会の中で多神教としてのフェティシズムを説いたことよって、一神教徒から批判を受けることになるが、それは彼が当時ヨーロッパ圏でメジャーだったキリスト教による宗教起源論の考え方を否定するため、あえて対極的な関係としてフェティシズムを起用したのである。本章ではキリスト教とド・ブロスとの両者の宗教起源論の違いを中心に、キリスト教の宗教起源論に対してド・ブロスによる批判を述べていく。

ド・ブロスとキリスト教における宗教起源論の論点には、アフリカに住む黒人民族のような野生人の宗教とヒエログリフや神話などで伝えられてきたようなエジプトの古代人の宗教を同一視する事で最初の宗教形態を決定づけるという前提のもと、それら二つの宗教がどんな基準で括ることが出来るかに焦点が当てられてきた。

それは古代民族の崇拜にユダヤ・キリスト教の唯一神や理論論的な最高存在が象徴されて、いるとする一種のプラトン主義的イデア論であり、異教とキリスト教には完全な断絶はなく、象徴と言うヴェールに包まれてはいるが、かつて同じ知的な神を崇めていた、あるいは現在も

崇めているとする考えである(一六)。

つまりキリスト教にとつて、異教とも呼べる野生人の宗教や古代人の宗教も完全に分離されるのではなく、そこで崇拜される神のイメージは、キリスト教で崇拜されると同じ知的で高尚な唯一神のイメージが先行しているとして、全ての宗教の始まりは一神教からであるとするとプラトン哲学のイデア論的な考え方が根幹にあった。そのため野性人や古代人の宗教で崇められる神の母体は元々一つの唯一神であるという一神教を宗教起源とする括りが宣教師などを通じて多くの人々に浸透していた。

しかしそれに対してド・ブロスはこの一神教を宗教の起源とするキリスト教の考え方を否定していくことになる。そのためにも彼は当時の宗教起源が唯一神であるという、すでにキリスト教宣教師などを通じて一般的になっていたこの解釈を批判するにあたって、代案として新たな宗教起源論を説く必要があった。そこでド・ブロスは宗教起源仮説として、野性人の宗教と古代人の宗教の新たな括りとしてフェティシズムを採用し、フェティシズムこそが宗教の起源であると主張していく。

ド・ブロスがフェティシズムを宗教起源論として扱うために重要となる焦点は、当時のヨーロッパ人およびキリスト教と比べて、野性人と古代人には共通してどちらも無知で文明が未発達な状態にあるという点が挙げられる。

恐怖に対して、いつも無防備な心や、希望に飢えた魂が、自由奔放に観念を混乱させて、教限りない、無意味な行為へと彼らを駆り立てるのである（二七）。

ド・ブロス曰く、人間は未知で確認し難い将来の不安によって宙吊り状態に置かれた際、その想像力を働かせて、まずは自らが感じ抱くような人間の力を超えた力の観念を外界の事物に想定してしまうという傾向があると説明している（二八）。

ド・ブロスから見た野性人にはその無教養さからくる、災害や疫病などによる恐怖に対して、身を守るためにまずは見に見える事物をそのままフェティシユとして崇め、信仰しようとする事でフェティシユを恐怖に対する手立てとして扱う野性の民族の習性がある事を説いている。

また彼ら野生の民族たちは自分たちが信仰しているフェティシユに対して、

これらの民族はその神格の選定に関して伝統的風習に従っているだけで、なんら合理的な思考を持たず、自分らでさえなぜそれを崇拝しているのか分からない（二九）。

と説明しているように、特にアフリカ人のフェティシユの風習はきわめて古いものであるとされており、彼ら野生民族の間でもその起源を知らない上に、文明が十分に発達していない状態の民族であるため、自分たちの信仰がどこから来たとか、自分たちの神についても何ら疑問を持たず、そのような

風習を続けるのは、ただただ祖先が太古の昔から続けてきた旧来の習慣を守り通しているというのが理由にある。

ここにド・ブロスは、一神教起源説への批判として、ヨーロッパ人と野性人との間には人間精神による崇拜対象の一般化レベルが異なるという点を述べており、そもそも野性人に唯一神という神を抽象的概念としての純粹な形で見出されることはまず無いと指摘している（三〇）。このように、野性人の思考は事物の抽象化に不慣れであるため、ド・ブロスは目に見えないキリスト教のような唯一神をイメージさせるようにするプラトン主義的な考えは、事物の抽象化を苦手とする野生民族には適していないとして否定し、代わりに野性人と古代人は共通して、無知からくる恐怖に対抗するために、感じ取った不可視の力を目に見える事物にそのまま投影しようとする民族の性質から、民族はフェティシユを信仰しようとするのだとして、宗教起源説にはフェティシズムが適していると説明している。

さらにド・ブロスは民族や文明人に関わらず、人間の持つ観念の自然な進歩として、

無知な民衆はまず、ある崇高な力に関する粗野な観念をわずかに抱き始めてから、その後、自然全体に秩序と形式を与える完璧な存在（唯一神）へと自らの観念を広げたことは、疑いない。（中略）人間精神は段落をなして低次から高次へと上昇する。この精神は不完全なものから抽出した抽象的観念によって完全なもの観念を形成して

いく(二)。

と説明している。ここでド・ブロスは野性人のような、感じ取った神の力を目に見える事物に投影しようとする感覚的対象を大事にする低次の状態から、ヨーロッパ人の思い描くような神のイメージのように精神的領域を大切に作る抽象的知識へと高次の次元へ移行していくのであり、人類史の宗教進化における原初の形態はフェティシズムであるとして宗教起源論を説明している。またこれと同時にド・ブロスのフェティシズムは宗教の最初の形態であるとしたが、その最終形態は一神教における唯一神へと進化するものであるとした。そして当時の宗教の原初形態は唯一神とするプラトン哲学的イデア論を批判するド・ブロスの主張は、新たな宗教起源論を説明すると同時に、フェティシズムを通して人間精神の段階的な自然進歩の原理から、宗教はモノに対する信仰から多神教を介して一神教へと進化するという、当時のヨーロッパ圏の中では全く新しい宗教進化論的発想を唱えることになる。この一八世紀に唱えられたド・ブロスのフェティシズムが、一九世紀以降、社会学の父と呼ばれたオーギュス・コントの「三状態の法則」の中に受け継がれるようになる。彼は人間精神が神学状態、形而上学状態、実証状態の三つの状態を順番に断続的な進化をしており、その初期段階の神学状態ではフェティシズムが適しているとして、オーギュスト・コントはフェティシズムを宗教の墮落形態としてではなく、人間精神の初期の自然的な発展として必要な側面であることを説いたこ

とで、後の宗教起源論に大きな影響を与えることになる。

結

本稿では、一八世紀に提唱されたド・ブロスのフェティシズムに焦点を当てて、キリスト教による批判とド・ブロスによるキリスト教への宗教起源論の批判を通じて、フェティシズムが啓蒙ヨーロッパ社会においてどのような意味持っていたかを説明した。

キリスト教からの批判では、偶像崇拜における聖性と物質性の観点に焦点を当てて説明した。キリスト教から見れば偶像崇拜とフェティシズムは、同じモノを神として崇めようとする物神を信仰しているという理由から、さほど違いを見られないまま同一視されるといふ背景があった。そのためキリスト教の宗教改革者らによる偶像崇拜批判によって、フェティシズム特有の崇拜物に聖性と物質性の融合を見出そうとする特徴を否定され、これをフェティシズムに対する批判として説明してきた。

従来のキリスト教では、聖画や聖像を使った偶像崇拜が一般的に認められており、崇拜物であるモノに対して神のイメージを投影しようとする信仰を認めている状態であった。しかしプロテスタント派の改革者たちによる宗教改革によって、それ以降の偶像崇拜による聖性の物質性の融合をよしとする風習を批判されていくことになり、キリスト教から物質性を排除しようとする動きが強まることになる。ここまで宗教改

革以降のキリスト教とド・ブロスのフェティシズムの関係性が対極に描かれる事で、結果的に宗教改革以降のキリスト教では、聖性と物質性を融合しようとするフェティシユ的要素を徹底的に排除する事で、物質と精神の二元論の確立に成功し、教内では見に見えるモノではなく、目に見えない神の崇拜を大切にしようとする信仰の内面化を推し進めていくことになる。このようにこの時代のフェティシズムの役割として、プロテスタント派の改革によってキリスト教を精神的宗教として前面的に押し出すことができたのは、あえてフェティシユ的要素とキリスト教を対極な位置に置くことで、それまでモノと精神を融合しようとする偶像崇拜から、初めてモノと精神を分離しようとするきっかけになったと考える。

またこのキリスト教とフェティシズムの関係がここまでに対極に描かれるのは、ド・ブロスの意図した構図であったという事を、彼が一八世紀にフェティシズムを提唱した理由において説明している。

ド・ブロスがフェティシズムを提唱した理由には、当時広く知られていたキリスト教的な唯一神が宗教の起源であるとする考え方を否定するためであり、当時メジャーであった宗教起源が唯一神であるのに代わって、新たな宗教起源仮説としてフェティシズムを採用することになる。アフリカ民族の野生人の宗教と古代エジプトの宗教は、ヒエログリフなどから分かるように同一視されるという前提のもと、キリスト教側の主張にはアフリカ民族も古代のエジプト人も、崇拜される神のイメージには、キリスト教と同じく抽象化された唯一

神であるという考え方が根幹にあり、民衆の間でも一般的な説としてあった。しかしド・ブロスはこの広く流通していたキリスト教による宗教起源の解釈を否定し、彼とつてアフリカ民族には無知で文明が未発達の状態であるという理由から、そもそもそのような民族では唯一神のような神を抽象化する自体が困難であり、目に見えない神よりも目に見えるモノから信じようとする習性があると主張している。そのためアフリカ民族の宗教の中でキリスト教のような唯一神をイメージする事は難しいとして、代わりにモノを信仰しようとするフェティシズムをド・ブロスは宗教起源論として提唱していくことになる。

ここで当時のヨーロッパ啓蒙社会の中でド・ブロスのフェティシズムの持つ重要な意義として、それまでの彼の宗教起源論にあったように、信仰や崇拜において人間と神の間の関係性が基本とされるキリスト教的な考え方から、そこにフェティシユのような人間とモノの間の信仰という新たな視点が導入されたという点である。また先述した通り、このフェティシズムが後にオーギュスト・コントによって受け継がれた際、人間精神の最初の段階にはフェティシズムが適していると定義され、ダーウインの進化論を経て宗教の進化論が議論される中で、フェティシズムが盛んに参照されるようになる。こうして、十九世紀に宗教学という学問が登場し、アニミズムやトーテミズムなど、神への信仰とは別様の宗教の起源を問うという道を、ド・ブロスのフェティシズムが開いたということが出来る。

注

- (一) 杉本隆司「ド・ブロスの宗教起源論と言語起源の問題」『宗教研究』八四号、二〇一〇年、五九頁。
- (二) 杉本隆司「ド・ブロスの宗教起源論と言語起源の問題」五八頁。
- (三) シヤルル・ド・ブロス(杉山隆司訳)『フェティシズム神の崇拜』法政大学出版局、二〇〇八年、一七四頁参照。
- (四) 田中雅一『フェティシズム研究 第一卷 フェティシズム論の系譜と展望』京都大学学術出版会、二〇〇九年、九頁参照。
- (五) シヤルル・ド・ブロス『フェティシズム神の崇拜』一一頁。
- (六) シヤルル・ド・ブロス『フェティシズム神の崇拜』一一頁。
- (七) シヤルル・ド・ブロス『フェティシズム神の崇拜』一二頁参照。
- (八) 田中雅一『フェティシズム研究 第一卷 フェティシズム論の系譜と展望』四六頁参照。
- (九) シヤルル・ド・ブロス『フェティシズム神の崇拜』一四頁。
- (一〇) 田中雅一『フェティシズム研究 第一卷 フェティシズム論の系譜と展望』五〇頁。
- (一一) 『出エジプト記』二〇章 三二五節。
- (一二) 田中雅一『フェティシズム研究 第一卷 フェティシズム論の系譜と展望』五一頁参照。

- (一三) 田中雅一『フェティシズム研究 第一卷 フェティシズム論の系譜と展望』五二頁参照。
- (一四) 田中雅一『フェティシズム研究 第一卷 フェティシズム論の系譜と展望』五四頁。
- (一五) 田中雅一『フェティシズム研究 第一卷 フェティシズム論の系譜と展望』五五頁参照。
- (一六) 杉本隆司「ド・ブロスの宗教起源論と言語起源の問題」五五頁。
- (一七) シヤルル・ド・ブロス『フェティシズム神の崇拜』八頁。
- (一八) シヤルル・ド・ブロス『フェティシズム神の崇拜』一〇二頁参照。
- (一九) 杉山隆司「ド・ブロスの宗教起源論と言語問題の問題」五六頁。
- (二〇) 杉山隆司「ド・ブロスの宗教起源論と言語問題の問題」五八頁参照。
- (二一) シヤルル・ド・ブロス『フェティシズム神の崇拜』九頁。

参考文献

- ・石塚正英『白雪姫とフェティシユ信仰』理想社、一九九五
- 年。
- ・石塚正英「フェティシズムとアニミズム・神々は儀礼から生まれた」『頸城野郷土資料室学術研究部紀要』五号 No. 一八、二〇二〇年。
- ・石塚正英「マルクスにおける「物神(フェティシユ)商品」と労働ガラート」『頸城野郷土資料室学術研究部紀要』七六号、二〇二二年。
- ・川島裕一「石塚正英『フェティシズム』論」『頸城野郷土資料室学術研究部紀要』七七号、二〇二一年。
- ・杉本隆司「オーギュスト・コントの歴史哲学と社会組織の思想」『一橋論叢』一二〇巻、二〇〇三年。
- ・杉本隆司「シャルル・ド・ブロスと18世紀啓蒙・その思想と知的生活」『一橋大学社会学科 古典資料センター年報編集委員会』二七号、二〇〇七年。
- ・杉本隆司『フェティシユ諸神の崇拜』法政大学出版局、二〇〇八年。
- ・杉本隆司「ド・ブロスの宗教起源論と言語問題の問題」『日本宗教学会編』八四号、二〇一〇年。
- ・ウィリアム・ピーツ(杉本隆司訳)『フェティシユ神とは何か?その問いの系譜』以文社、二〇一八年。
- ・田中雅一『フェティシズム研究 第一巻 フェティシズム論の系譜と展望』京都大学学術出版会、二〇〇九年。
- ・月本昭男『宗教の誕生・宗教の起源・古代の宗教』山川出版社、二〇一七年。
- ・古野清人「シャルル・ド・ブロスと実証的精神」※現代かな『哲学年報』一三号、一九五二年。

二〇二二年度 宗教学科 卒業論文一覧

藤田瑠美	天理教の親孝行と一般的な親孝行の違い	高橋勇和	―インタビュー調査より― 里親と信仰―天理教里親へのインタビュー調査をもとに―
池野理輝	『逸話篇』十六「子供が親のために」から見る 真実とは	田上大介	「ひのきしん」とポランティア―その意味とポランティアとの関係性―
岩切寿代	つくし・はこび―二代真柱の『真柱訓話集』にみる「つくし」「はこび」―	田村正治	三代真柱様のお言葉を読んで―若手育成、ひながた、教会に焦点を当てて―
岩本大輔	現代日本人の宗教への思いの変化―メディア報道による宗教への影響から―	服部開人	マンガにみる「七つの大罪」―『七つの大罪』『鋼の錬金術師』に着目して―
榮嶋吉太郎	天理教と性的マイノリティー―世界三大宗教との比較から考える―	服部徳亜	「ほこり」について―天理教救済論から―
大石希	遊びとスポーツ―ホイジンガの所論を中心に―	政田龍太郎	フェティッシュ神から見る宗教起源
岡崎星空	甲賀大教会初代会長の身上の神意―「おさしづ」を通して―	松川高洋テオ	フランスにおける天理教
岡田馨煥	宗教とオリンピックク	松谷春希	天理教の結婚観
鬼武駿一郎	成人式の歴史とその変容	松田隼人	伊勢神宮の歴史
熊代壮	明治神宮と東京六大学野球	水谷竜也	『スター・ウォーズ』の描く「家族の神話」の物語と学び―「現代の神話」の役割と現代人の課題―
小西鉄平	日本のrap musicにおける救済観と宗教的思想―	山本奈美	おてらおやつクラブの配給ほどの程度食品ロスと関係しているか
齋藤寛志	日本で人気の高いrap musicの歌詞に注目して―オウム真理教について―オウム真理教が日本に起こした影響―	山本勇也	天理教教団の歴史―講から教会へ―
柴垣有希	天理教の教会における「こども食堂」の位置付け	横山基生	インターネット布教の可能性
		伊藤寛人	赤瀬川原平の「日本的」なるもの―「宇宙の缶詰」の検討を通して―

【成人会より】

成人会委員長としての一年を通して

第七〇代宗教学科成人会委員長 田垣広太郎

私にとつては、この一年間はとても短く、とても早く感じられた一年でした。六九代委員長の松川さんからバトンを渡されて、私が成人会を引つ張っていくのだと心に誓つて通らせてもらおうと思つたのですが、実のところ私自身は、周りのメンバーに支えてもらつてばかりでした。

しかし、それでも、この一年間の委員長としての活動を通して、私は多くのことを学ぶことができました。何よりも、どんなことでも上から見るのではなく、自分も一緒になつて横から見るといふことの大切さと素晴らしさを学ぶことができました。

次の会長の大岳君は、私よりも最も素晴らしい素質を持っているので、今までの成人会では十分に出しきれなかった可能性を大いに引き出してくれると信じています。私は、第六九代の役員の皆さんから渡されたバトンを第七一代の皆さんに繋ぐことができ、今はほつととしています。

一年間、どうもありがとうございました。

二〇二二年度 成人会役員

委員長 田垣広太郎

副委員長 岸田爽

副委員長 木村修哉

情報宣伝 紺谷凌

書記 宮下正直

会計 馬塚元典

渉外 木村大海

庶務 丸山慶太

二〇二二年度 成人会 活動報告

四月二九日 成人会・アルコイリス会合同行事

七月十六日 成人会・アルコイリス会・金剛会合同行事

九月一日 長島愛生園訪問（「架け橋」の会）との共催

十一月四・五・六日 天理大学祭参加

二月二三日 「第二回 架け橋 交流・講演会」参加

【会員の声】

成人会で学んだこと

三年次生 木村修哉

第七十代成人会では、副会長を一年間通らせて頂きました。先輩方から代を引き継ぎ、また一年間で成人とはどういうことなのかを先輩達に教えることができ、繋ぐことができました。

新型コロナウイルスの影響もあり、限られた中でしたが、行事を行うことができました。大学行事での大きな行事を無事に迎えることができ、また体育祭や学祭に参加して様々な、お引き寄せがあったことから、成人会一同はまた一歩、成人の歩みを進めることができました。

この一年間、改めて色々な行事を経験し、当たり前のことは当たり前ではないと言う事を知ることができました。当たり前に出ることも感謝していくことができた一年でもあったと思います。次の代へと無事に渡すことができて、これらのことを先輩達へ繋ぐことができました。副会長として学んだことを今後とも活かしていきたい、感謝の気持ちを持って通らせて頂きたいと思います。

一年間、どうもありがとうございました。

私と成人会

二年次生 大岳一雅

私は第七十一代成人会委員長に就任しました。とても喜ばしい事ですが、同時に責任をとっても重く感じています。この気持ちを忘れずに、これから一年間過ごしていきたいと思えます。

私が成人会の存在を知った経緯は、学祭の準備がとても大きかったです。前委員長さんに誘われて、今まで行った事がなかった心光館にある成人会の会室に一人で行きました。その時はとても心細い思いでした。「先輩に誘われたけど、知らない人しかいないし、気まづくなるだけだろうな」と思っていました。ですがその緊張も会室に入ってすぐに無くなりました。会室の扉を開けたら先輩方が、よく来てくれたね。ありがとうございます。と笑顔で迎えてくれたからです。私は先輩方がしてくれたあの笑顔が忘れられません。

私は成人会を、笑顔が絶えない学科会にしたいと思っています。説明するのが難しいですが、「ありがとうございます」を言った後にニコツと笑える。そんな素敵な会にしたいと思っています。

一年間、どうぞよろしくお願いいたします。

成人会副委員長に就任して

二年次生 神田尚吉

入学した当初から、成人会の先輩方にはお世話になってきました。

中でも最も助けていただいたのは、学祭の時でした。新型コロナウイルスの影響で、先輩方にとっても初めての学祭だったので、資料や情報を元に、より良い企画を作ろうと尽力してくださり、私たちをしつかりと導いてくれました。

そのおかげで、今年度の天理大学祭は、私の一生の思い出に残る学祭にすることができました。また同時に、来年は自分たちが、成人会を背負って導いていきたい、という決意が固まりました。

まだまだ未熟者の私ですが、皆さまの力をお借りしながら、これまでの先輩方が築き上げてきた伝統を崩すことなく、全員が喜び、感謝の心を持って過ごせる成人会を作れるよう、副会長としての仕事を全うしていきたいと思っております。

一年間、どうぞよろしくお願いいたします。





成人 第七〇号

発行日 二〇二三年三月一九日

編集 天理大学宗教学科研究室

発行者 天理大学成人会

印刷・製本 天理大学DPセンター